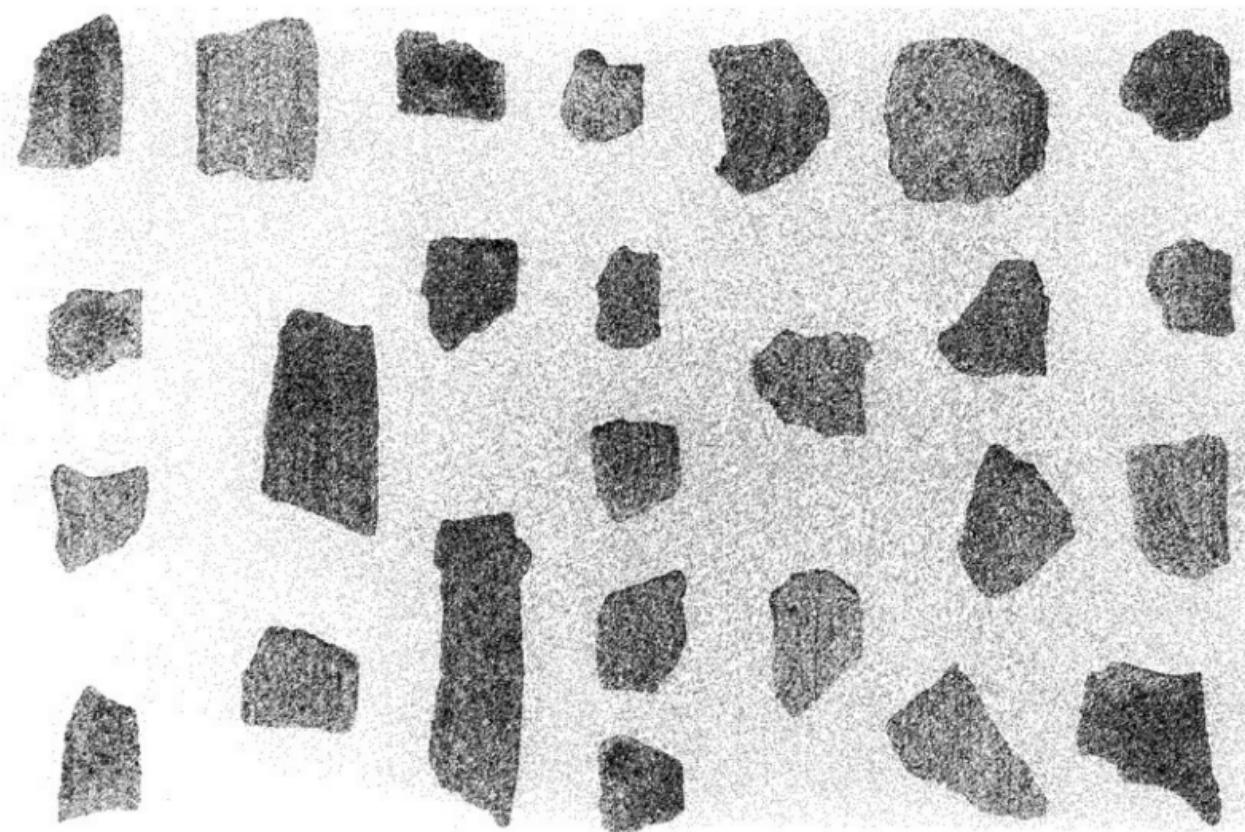
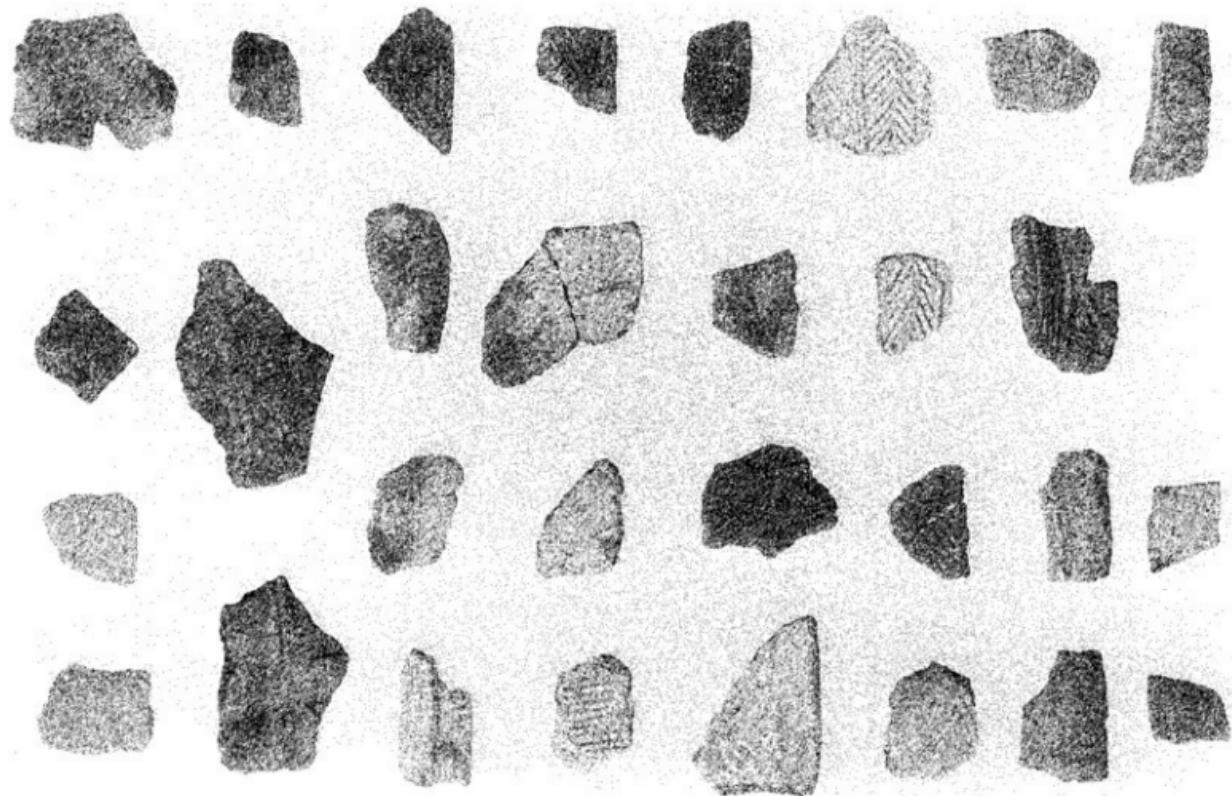
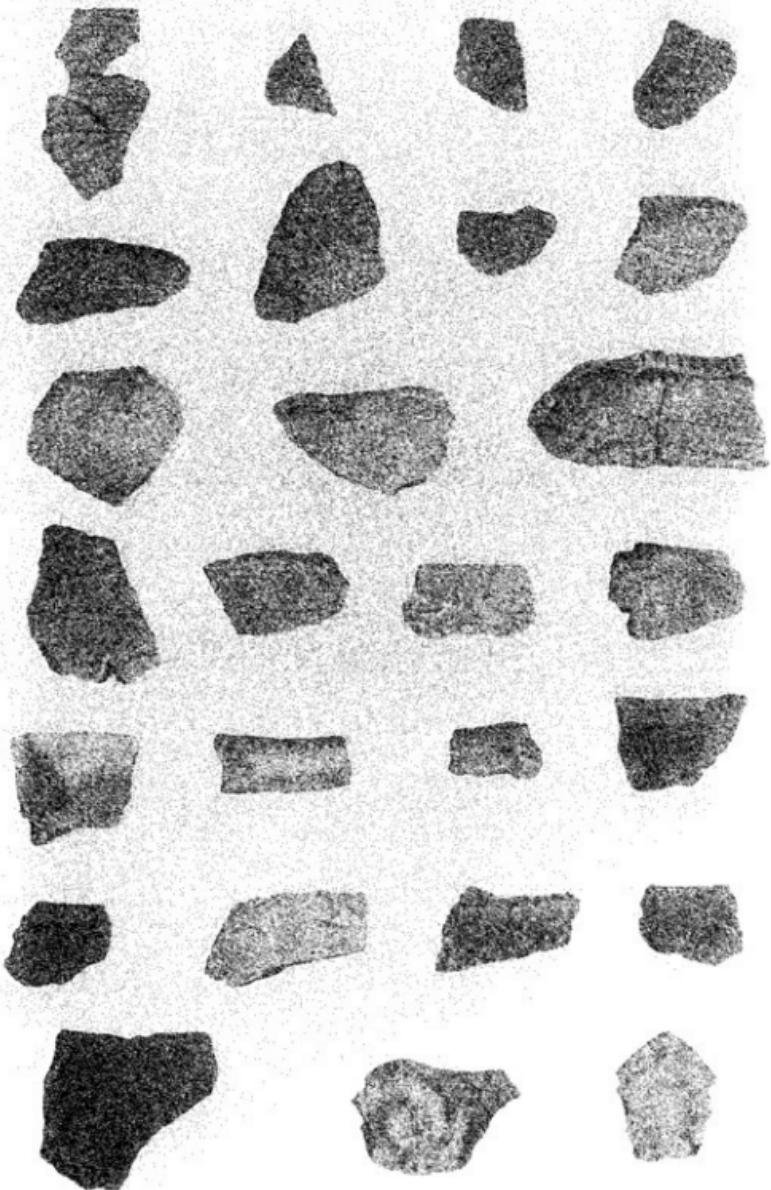


圖版26 通鑑外出土土工器

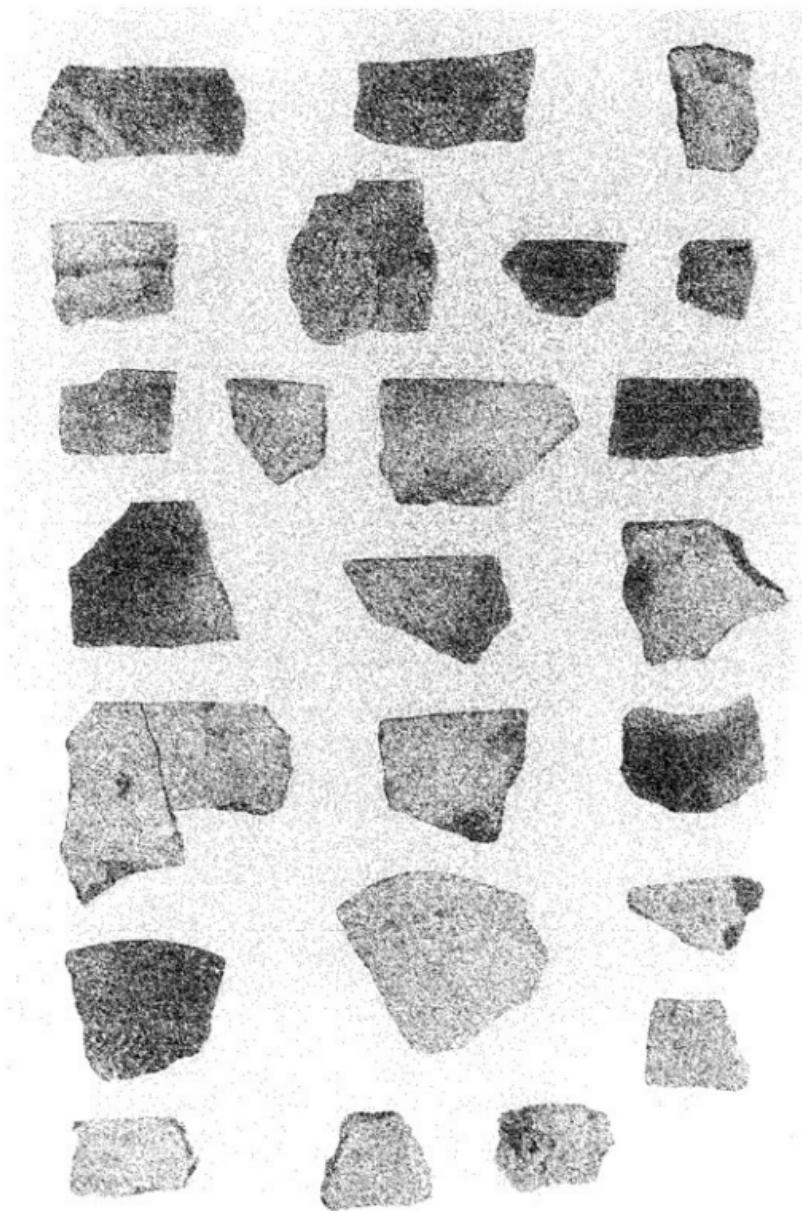


圖版27 潘掛外出土土器



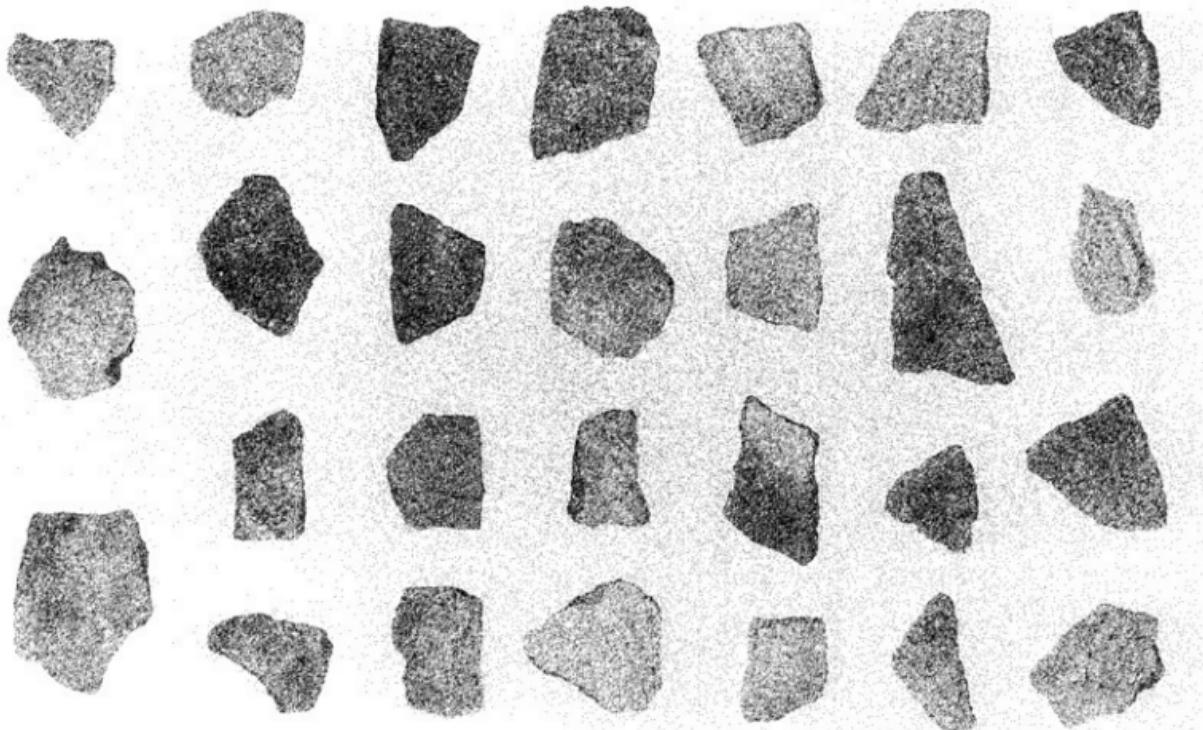


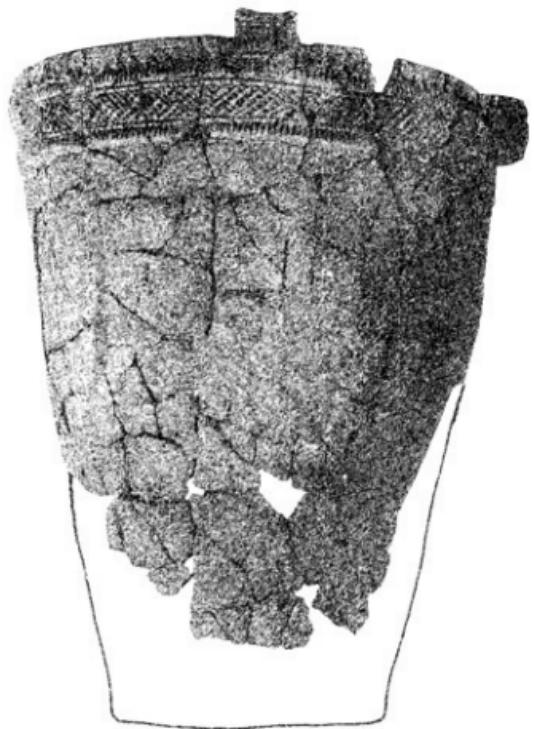
圖版28 遺構外出土土器



図版29 遺構外出土土器

圖版30 漢陽外出土土器



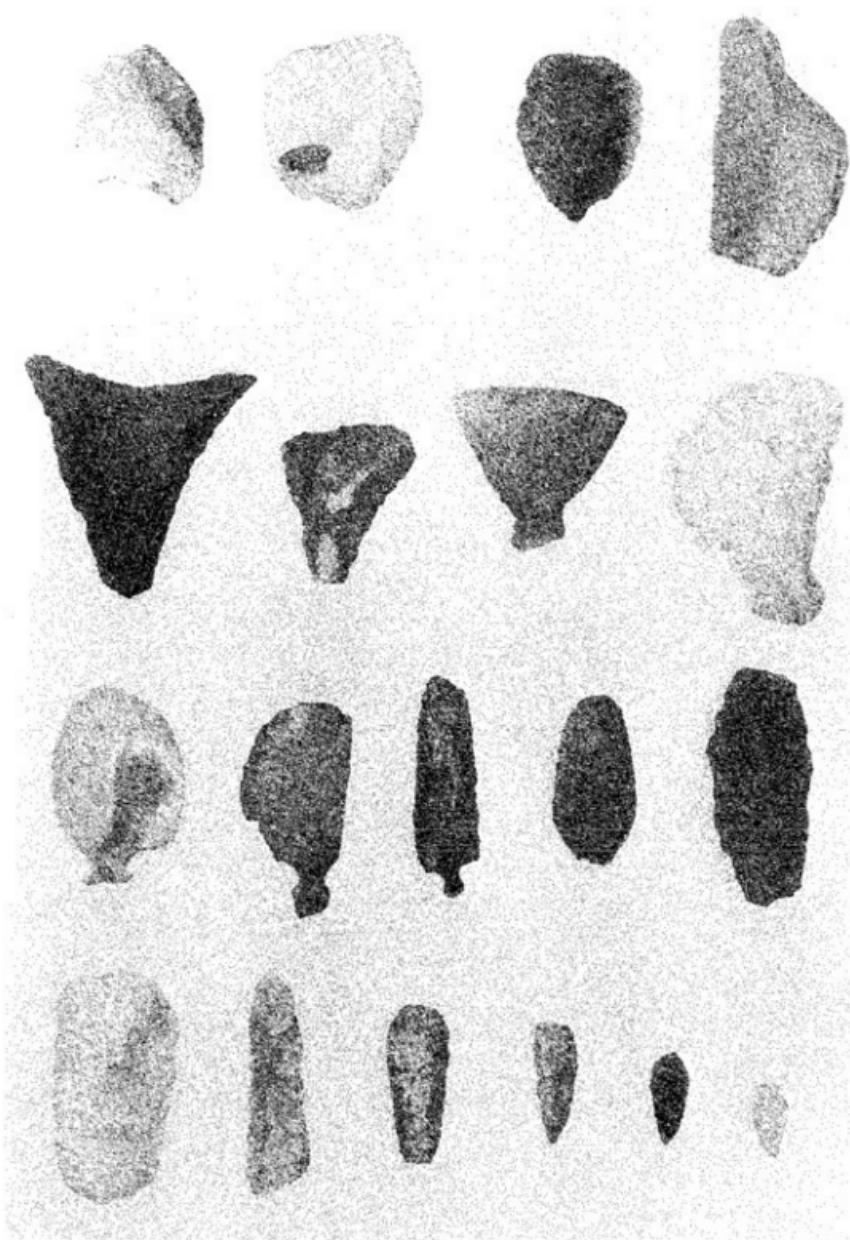


圖版31 遺構外出土土器



圖版32 遺構外出土遺物

图33 漆器外出土石器





図版34 遺構外出土石器

下堤G遺跡(先土器時代)
発掘調査概報

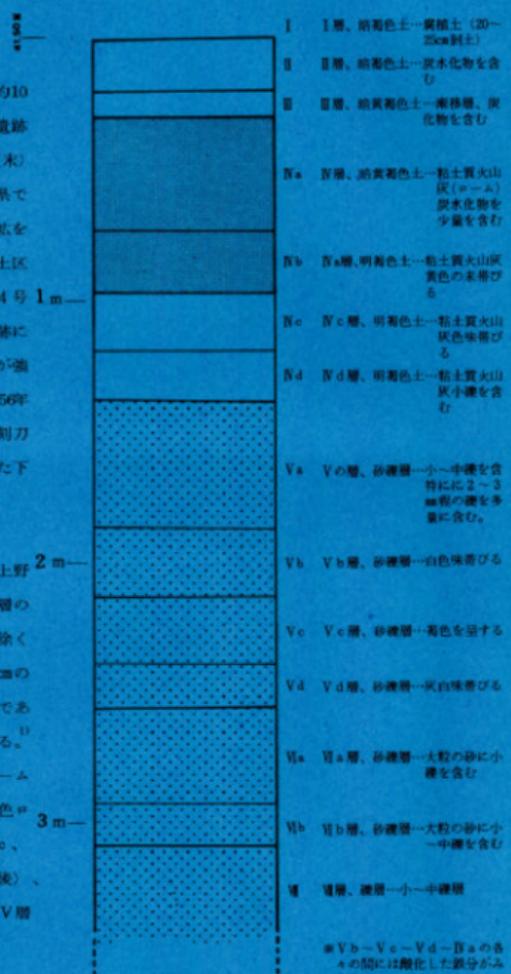
下堤G遺跡・先土器時代の概要

遺跡の概観

南に張り出した舌状台地（約10,000m²）の東側に位置する。遺跡は縄文時代前期（末）、中期（末）の遺跡との複合であり、秋田県では初めて確認された櫛群、土払を含む先土器時代の遺物集中出土区は縄文時代中期末の住居跡（4号 1m—住居跡）と重複し、この住居跡によってこわされている可能性が強い。遺跡の北東約600mに昭和56年発掘調査で石刃、櫛石刃、彫刻刀形石器（荒屋型）等を出土した下堤D遺跡がある。

層位

標高40m前後のこの台地は上野台段丘Ⅰと呼ばれており、表層の1~2mの粘土質火山灰層を除くと段丘堆植物は最大径20~30cmの礫を含む礫層で厚さは5m程度であり、下部は第3系となっている。¹¹⁾先土器時代の遺物はⅢ層（ヨーム、歴移層）、Ⅳa、Ⅳb層（明褐色2~3mm）からの出土で、以下Ⅴc、Ⅳd層（無遺物層、厚さ30cm前後）、約1m~40cmの深さで礫層（（V層～）と続く。（第1図）



第1図 地層図

出土遺物

出土石器の総数は870点ほどで（出土層位、地点が明確でないもの22点を含む）、石器の組成と量は、ナイフ形石器（13点）、石刃（43点）、米ヶ森型台形石器（106点）で単純な組成を有し、剝片、碎片の量が多い。他に台石（3点）、鍛器（1点）がみられる。

東ナイフ形石器、石刃、米ヶ森型台形石器の分類は富澤（1977年）に準ずる。

ナイフ形石器（第4図1～12、第5図1）

ナイフ形石器は13点出土している。石質は全て硬質頁岩である。小形細長剝片と石刃（長さ3.5～5.5cm、巾1～2cm）を素材とするものであり、打面部を基部とする一群のナイフ形石器である。

A類

背面のすべての剝離面の打撃方向が主要剝離面と同方向のもの（第4図1、2、3、4、6、7、9、10、11、12、第5図1）

B類

背面の剝離面の中に主要剝離面と逆の打撃方向の剝離面を含むもの（第4図5）

C類

背面の剝離面の主体は主要剝離面と同方向で、その中に散発的に横方向からの剝離面をもつもの（第4図8）

打面については、打面を残すものⅠ類、残さないものⅡ類とする。

Ⅰ-a類

打面を小さく残し、プランティングが基部両側辺、又は一側片に施され、陵線が左右にゆるく湾曲するものも含み、先端が尖る。（第4図1、2、3、4、先端欠損2、4）

Ⅰ-ⅰ類

打面、基部調整はⅠ-a類と同様であるが先端がにくく尖る。（第4図6）

Ⅰ-c類

打面を小さく残し、基部、先端部一側片にプランティングを施す。（第4図7）

Ⅱ-a類

打面を取り除く（打痕が残る）以外はⅠ-a類と同様のもの。（第4図5、8、8には基部裏面調整的な剝離がみられる）

Ⅱ-ⅰ類

打面は完全に取り除かれ、プランティングは基部両側辺又は一側辺に施される。先端は聞く形であるが、逆方向からの剝離によるということではない。（第4図9、10、11、第5図1）

Ⅱ-c類

先端部にプランティングを施す以外はⅡ-ⅰと同様である。（第4図12）

石刃（第5図2～14、第6図1～12、第7図1～9）

石刃として認定できるものは43点で、石質は全て硬質頁岩である。小形、中形(長さ3.2~8.6cm、巾1~3.3cm)の大きさで中形の石刃が過半数を占める。打角は $110^\circ \leq \alpha < 120^\circ$ に最も分布する。

A類

背面のすべての剥離面の打撃方向が主要剥離面と同方向のもの。(第5図2、4、6~8、10~12、第6図1~11、第7図1~6、8、9)

B類

背面の剥離面の中に主要剥離面と逆の打撃方向の剥離面を含むもの。(第6図9、12、第7図7)

C類

背面の剥離面の主体は主要剥離面と同方向で、その中に散発的に横方向からの剥離面をもつもの。

(第5図3、5、9、13、14)

石刃核 (第17図1)

石刃の出土量からすると石刃核が極端に少なく、小形の石刃核が1点だけである。半円の平坦打面をもつ石核で、頭部調整を行ない削離されている。横方向からの剥離が一面みられる。

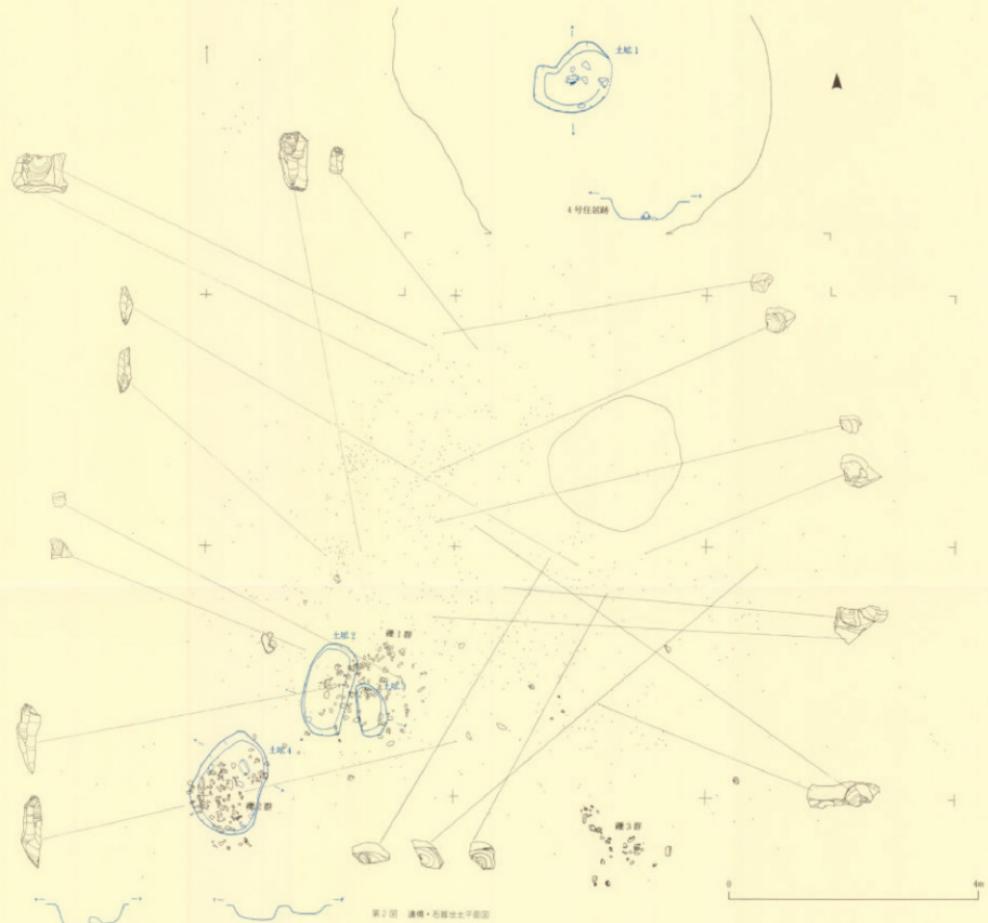
米ケ森型台形石器 (第8図1~12、第9図1~17、第10図1~12、第11図1~15、第12図1~12、第13図1~10、第14図1~9)

昭和50年、秋田県「米ケ森遺跡」(富樫、村岡、1976年)³⁾で、新しい技法による剥片剥離の石器が確認され、「米ケ森型台形石器」と名づけられた一群の石器がある。今後、資料の増加、組成、機能の細検討の余地はあるにしても、完成された石器であることはまちがいない。名称については一応、米ケ森型台形石器として進める。

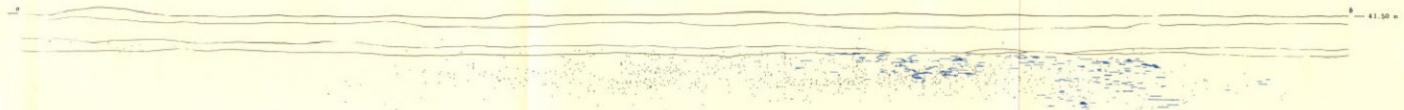
米ケ森型台形石器は106点出土している。石質はすべて硬質頁岩である。石器の特徴は、打面は平坦で、多くは大きく残る。大きさ(第15図)、形態に規格性が強く、末端はヒンジフラクチャーで終ること。打面を上にして背面石側に最も古い石核面を残し、その面と主要剥離面が鋭利な刃部を形成する。最も古い石核の左側に直前の剥離痕を残すのが通常である。刃部には例外なく微細な刃こぼれがみられる。打面と相対する末端に二次加工があるものが6点ある。以上のような特徴点を上げて米ケ森型台形石器の認定をして置く。

石核 (第17図2~9、第18図1~4)

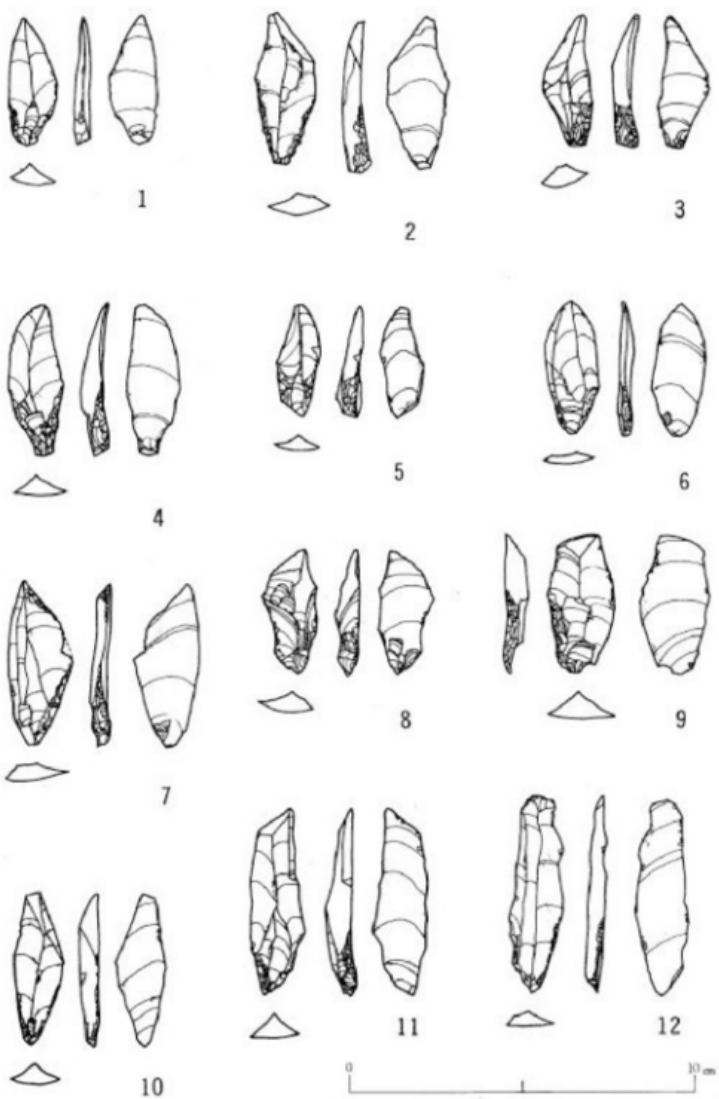
約20点ほど確認されている石核はすべて米ケ森型台形石器を剥取したもので、自然面が残る石核が11点ある。「米ケ森遺跡」の米ケ森型台形石器石核も自然面の残るものが多い。打面と米ケ森型台形石器剥離面の作出はかなり意識されており、剥離方向は基本的に左から右に行なう(米ケ森技法)が、米ケ森型台形石器剥取面が各方向に作出される例が多く、それだけ各方向からの剥取がみられ、必ずしも剥離痕が石核に残らない事を考慮しても一方向、一面から10回以上の連続剥離された石核はない。



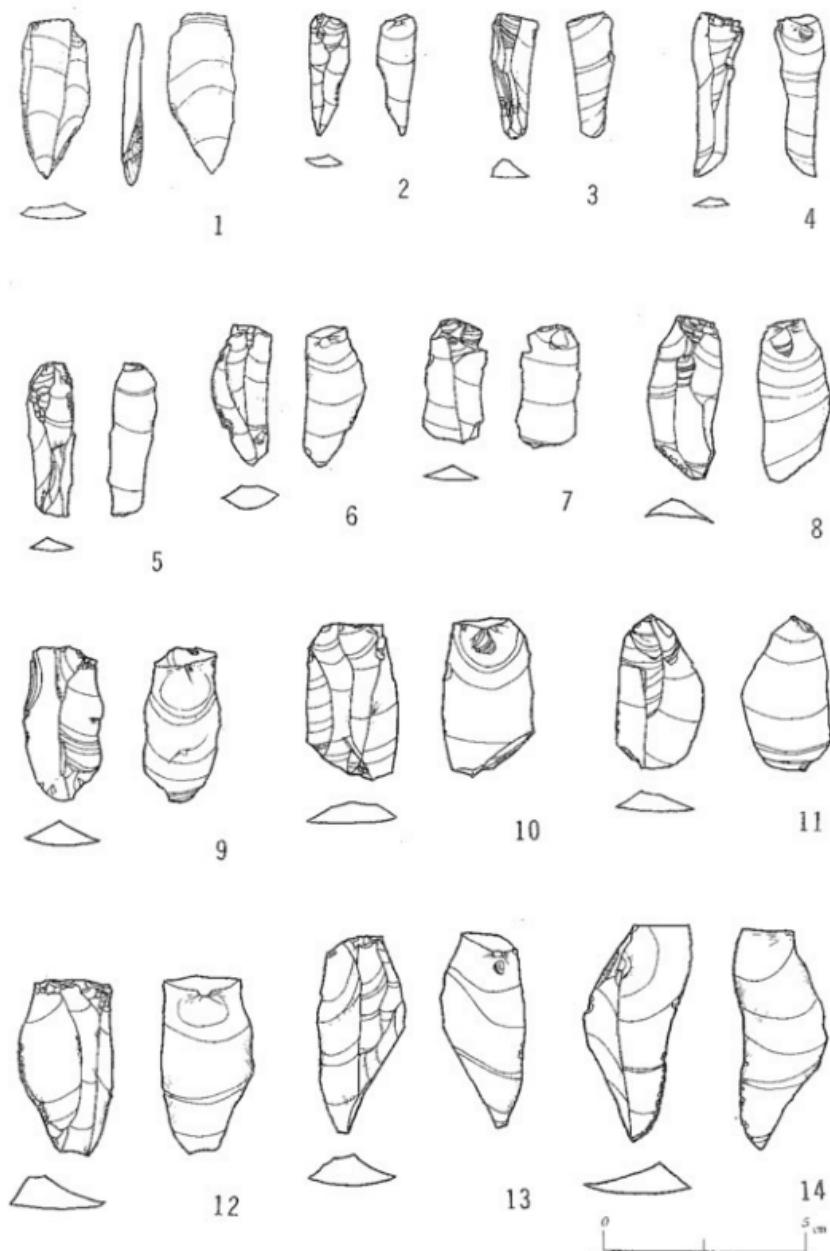
第2图 遗址·古建筑平面图



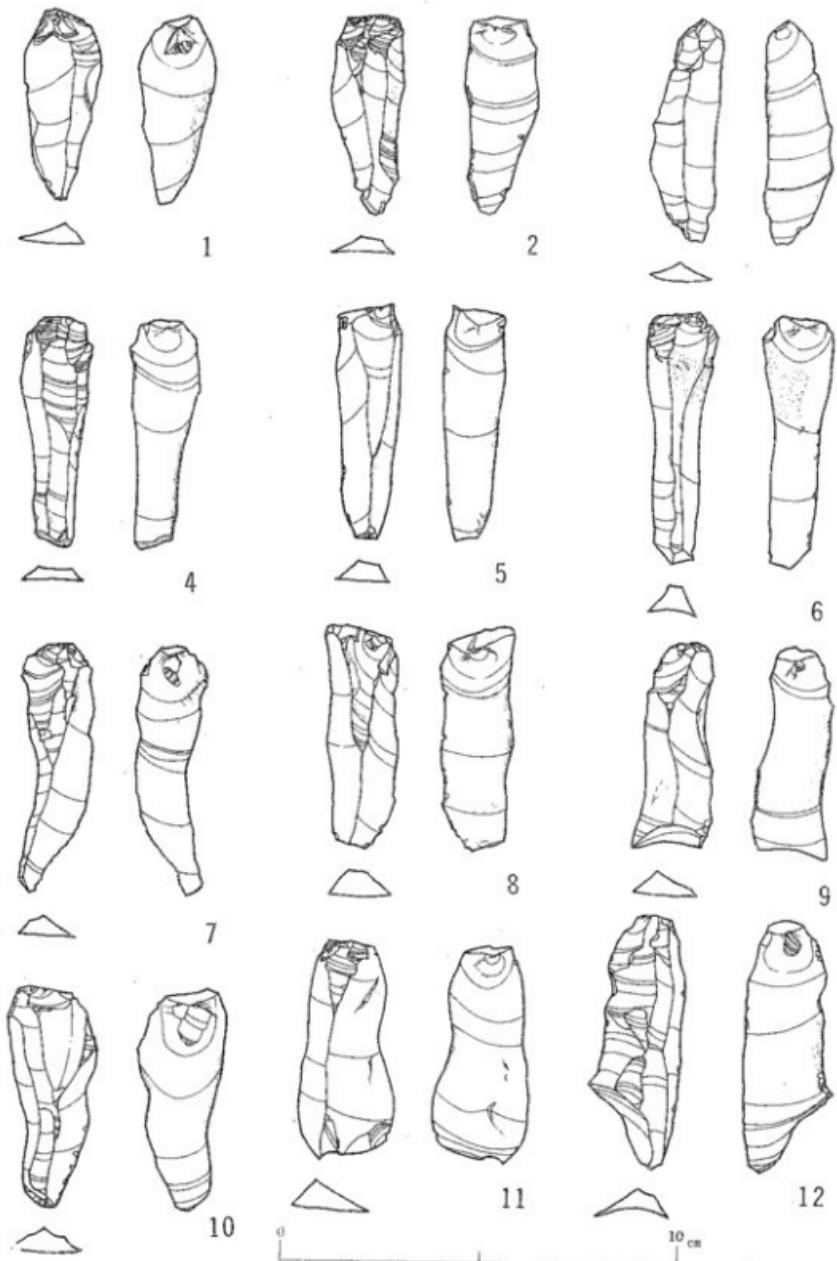
第3図 石器・礫群、垂直分布図 (青線は礫のレベル)



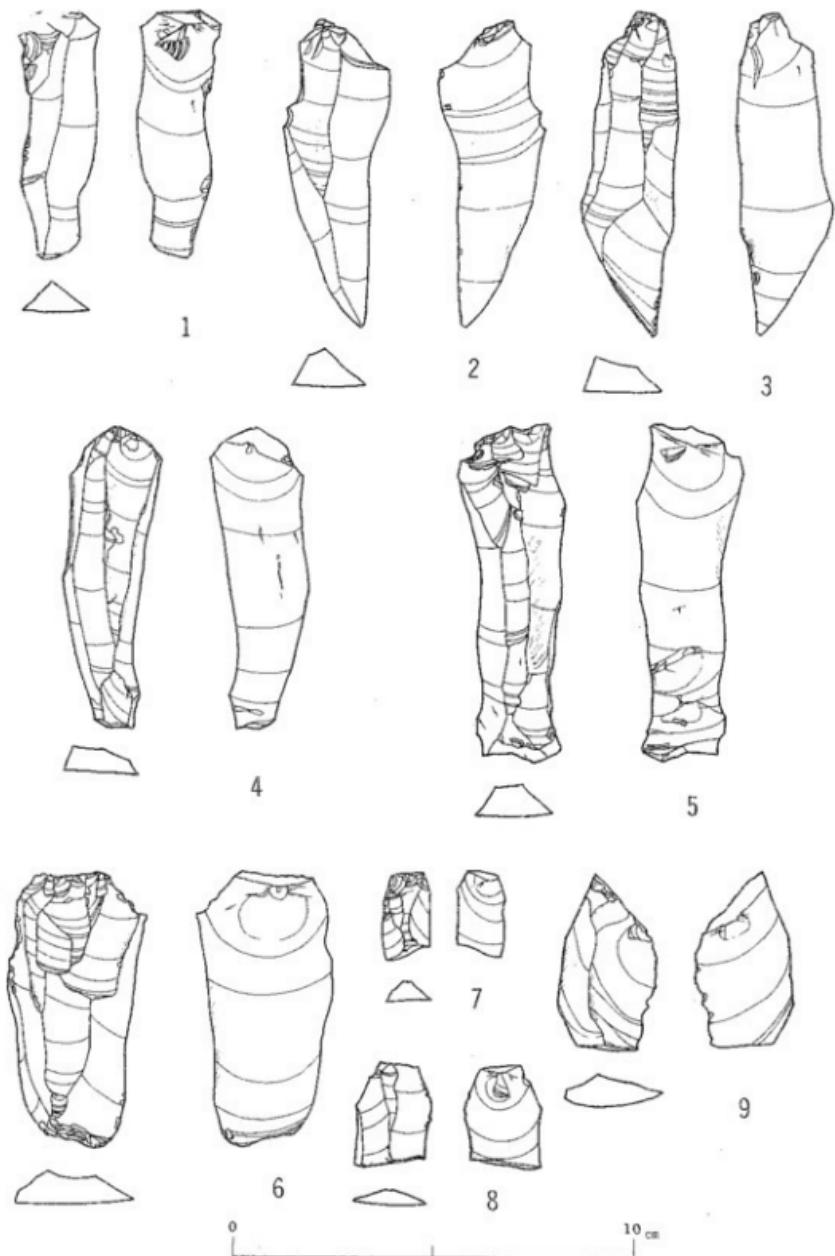
第4図 ナイフ形石器



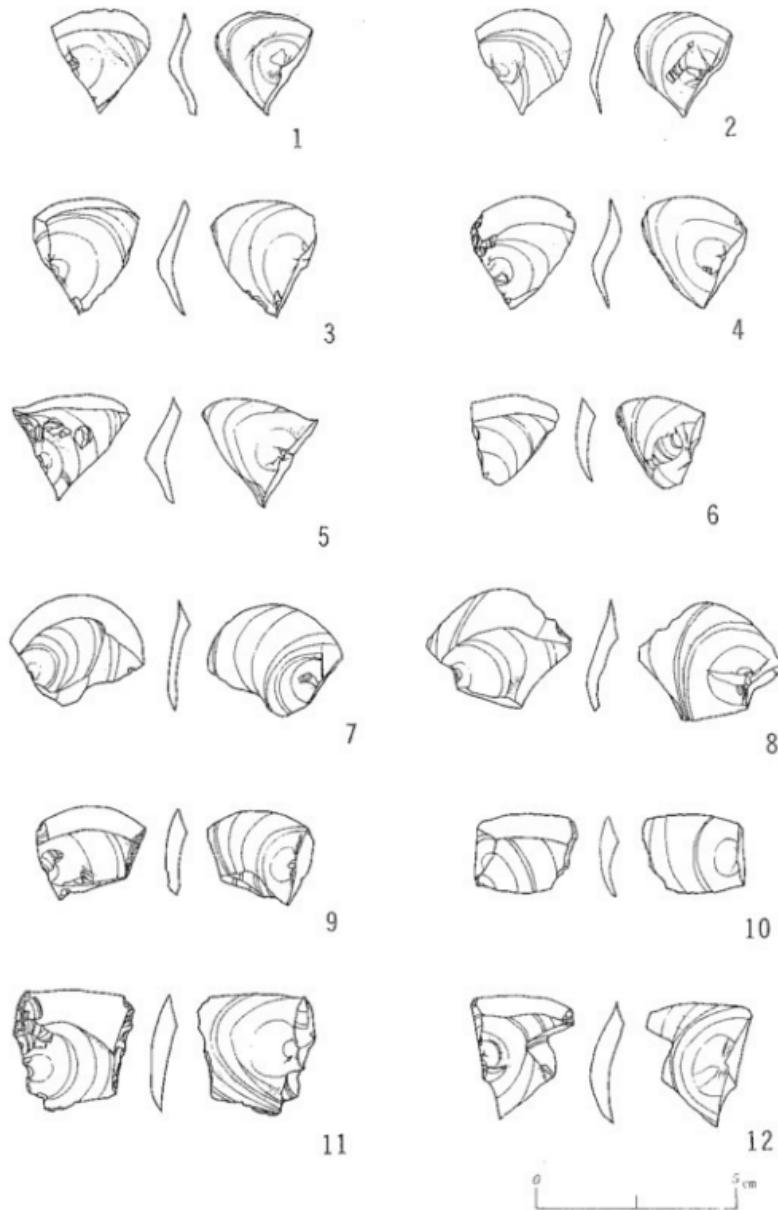
第5図 ナイフ形石器・石刃



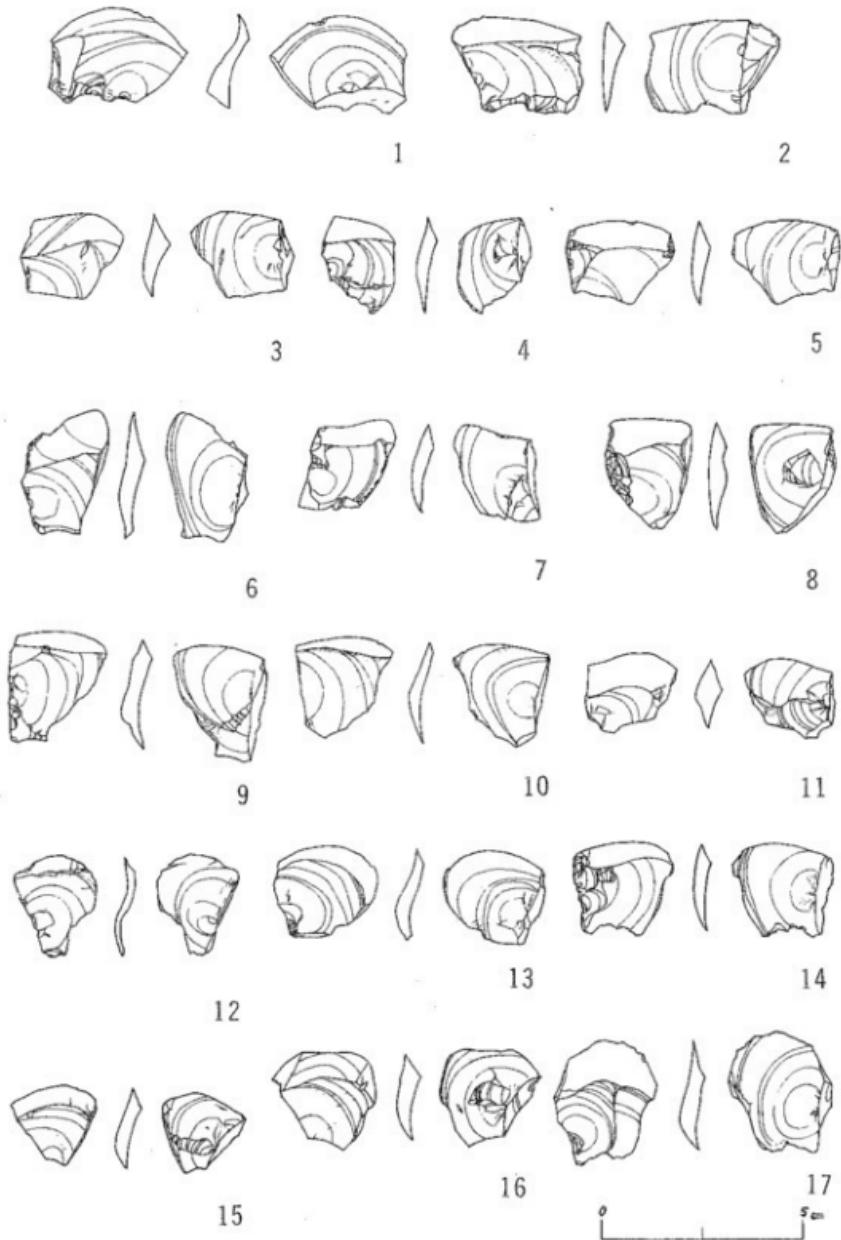
第6図 石刃



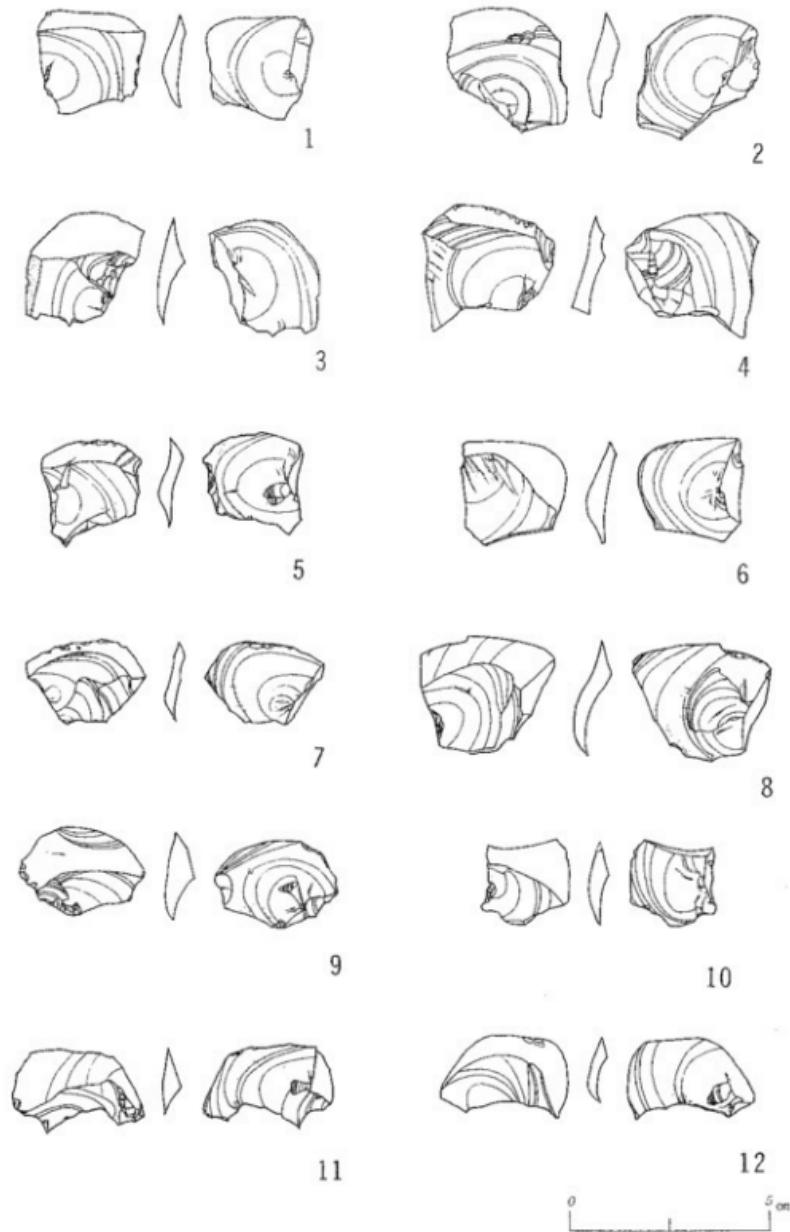
第7図 石刃



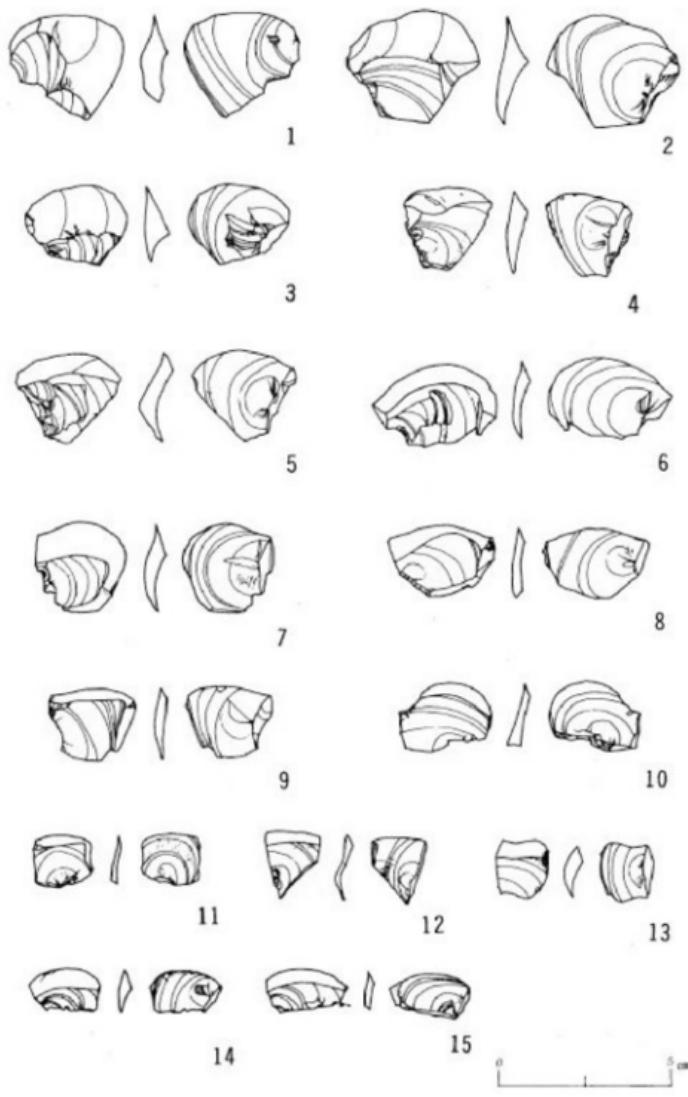
第8図 米ヶ森型台形石器



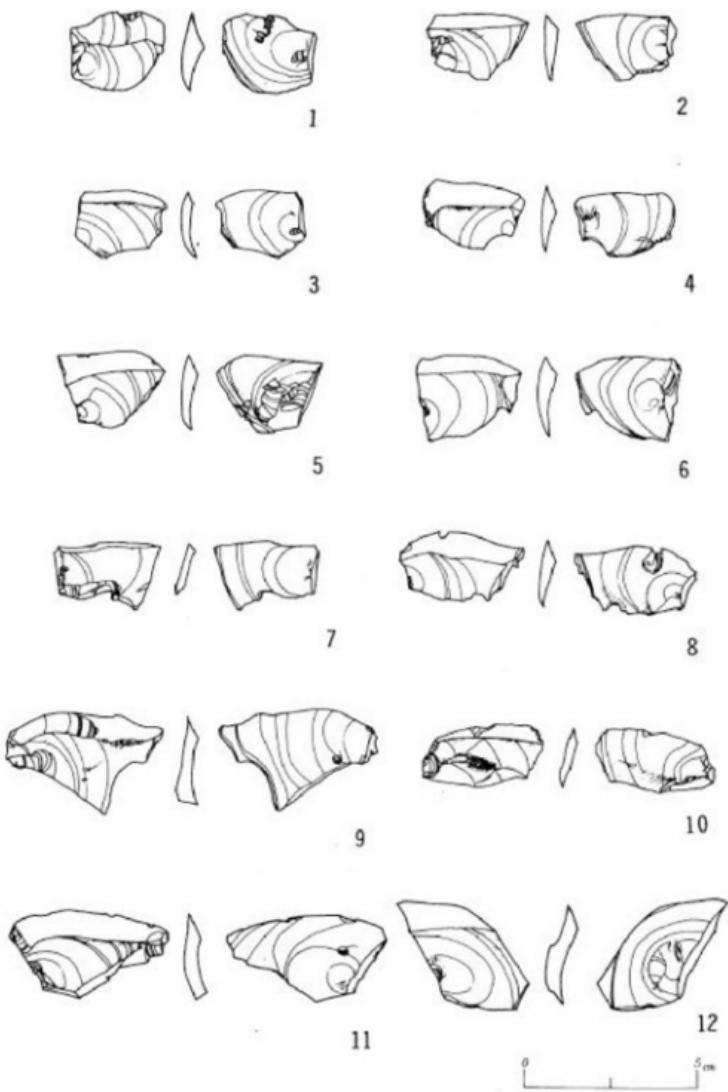
第9図 米ヶ森型台形石器



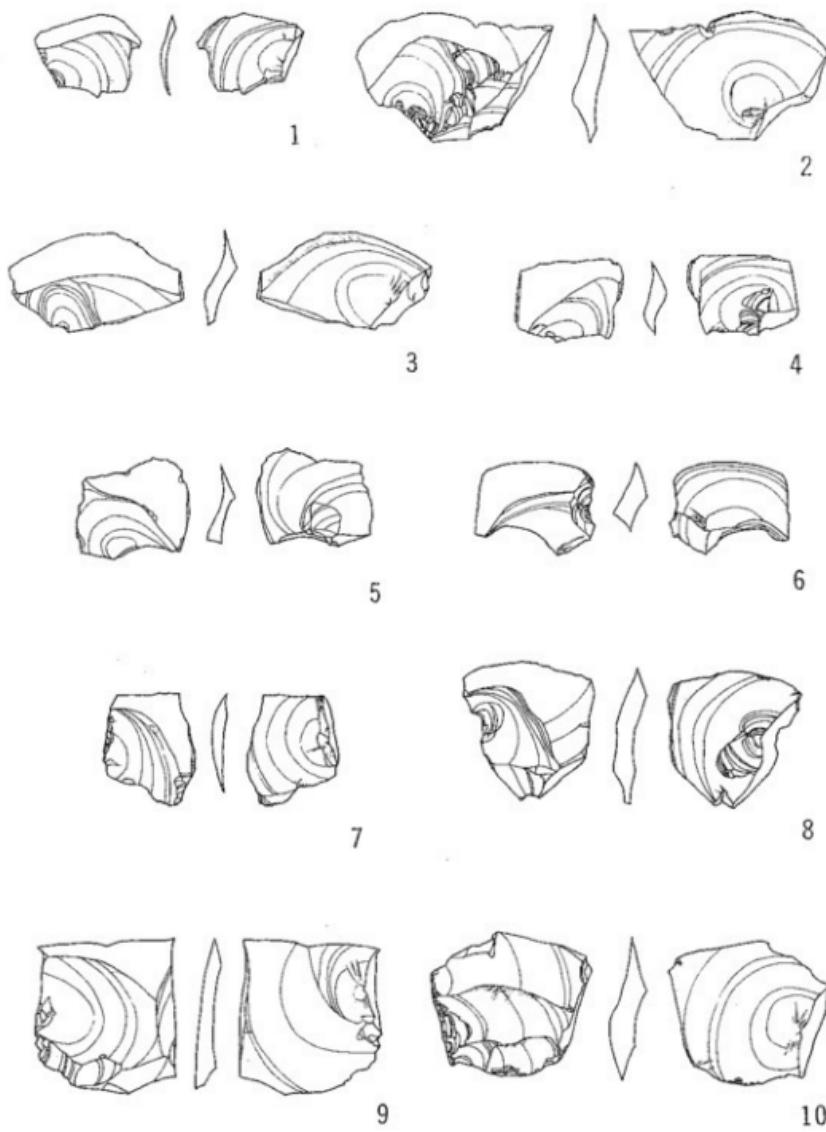
第10図 米ヶ森型台形石器



第11図 米ヶ森型台形石器

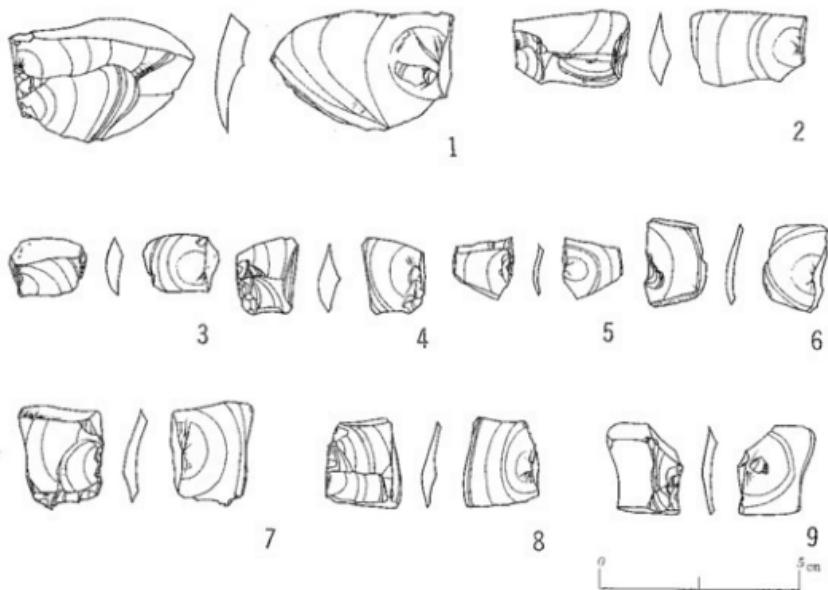


第12図 米ヶ森型台形石器

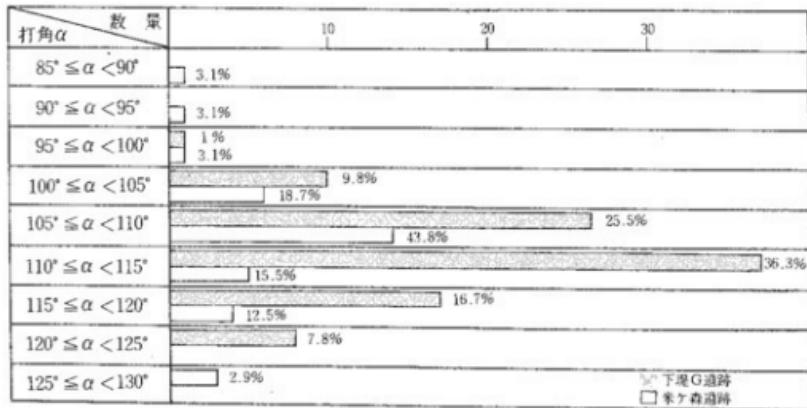


0 5 cm

第13図 米ヶ森型台形石器



第14図 米ケ森型台形石器



第15図 米ケ森型台形石器打角分布

接合資料（第18図5～9、第19図1～5）

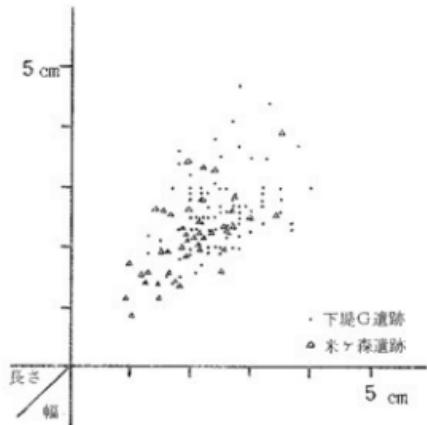
ナイフ形石器十ナイフ形石器、石刃十石刃、石刃十石核、米ヶ森型台形石器十米ヶ森型台形石器、米ヶ森型台形石器十石核がある。

両面礫器（第19図6）

この礫器は先土器時代の遺物出土地区の北西クリッド（第Ⅱ層）出土であり、出土地点は不明である。自然礫の一部を両面からの連続剝離で刃部を作っている。石質は凝灰岩である。

遺構

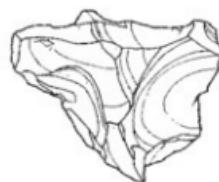
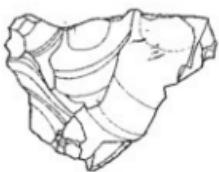
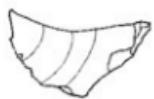
礫群と土塙



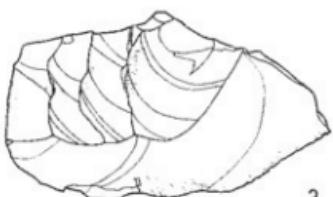
第16図 米ヶ森型台形石器長幅分布

3ヶ所の礫群が検出され、土塙を伴なう礫群が2ヶ所（礫1群、礫2群）ある。礫3群は風倒木により移動している。礫は自然礫で径約3～20cmほどの亜円礫であり、径約160cm前後の範囲に密集する。堆積厚は50cmでⅣa、Ⅳb層中に含まれ先土器時代の遺物出土層と同一である。これらの礫は下部礫層の礫と考えられるもので凝灰岩が主である。礫群中に割れの生じたもの、表面が剥落した礫が多く含まれ、火熱による影響と考えられる。また礫表面に煤状の付着物がみられるものがある。

七塙は4基確認された。塙内の礫についても前述の礫群の礫と同様であり、塙内に特に炭化物が多く含まれていることはない。土塙1の上部には礫群があったと予想される。4号住居跡の構築時に取除かれたものであろう。塙内に礫がみられる。



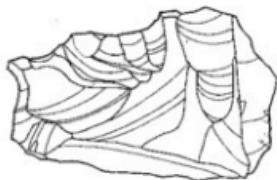
1



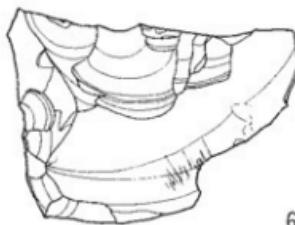
3



4



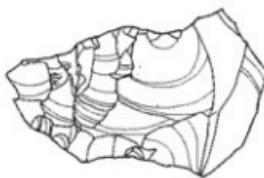
5



6



7



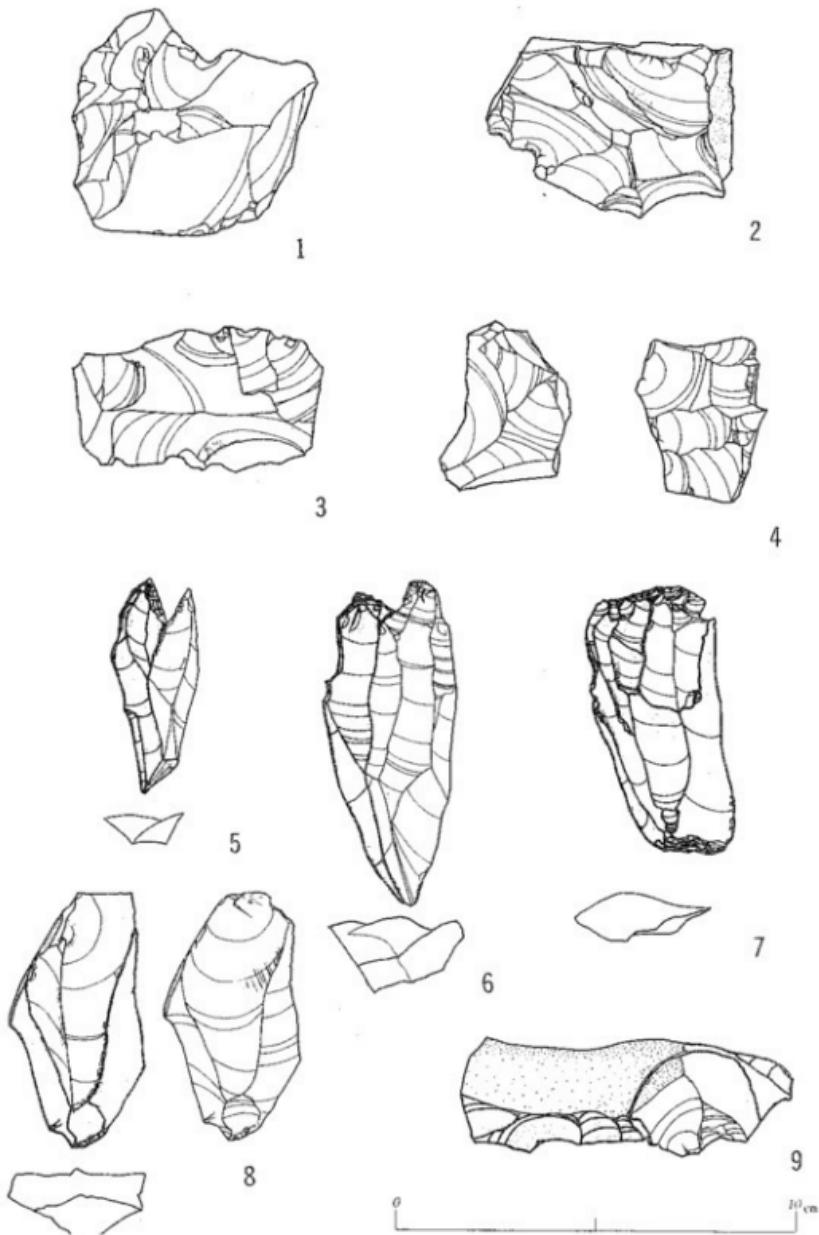
8



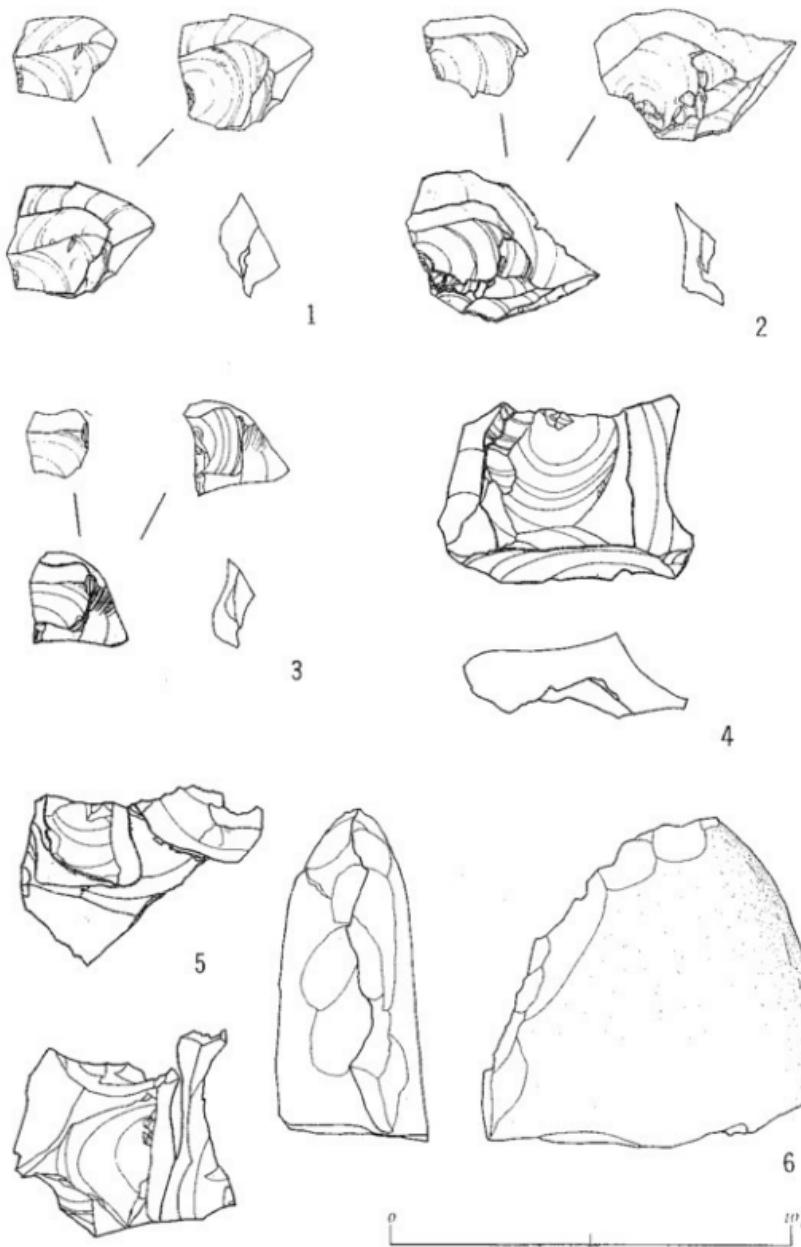
9



第17図 石核



第18図 石核・接合資料



第19図 接合資料・礫器

まとめ

下堤G特徴としては石器の器種が少ない事である。（組成 ナイフ形石器、石刃、米ヶ森型台形石器）、遺物の集中出土範囲は10m×12mで、1つのまとまり（ユニット）であり、第2図の接合資料の関係からみてもユニットの中でなんらかの意味をもつまとまり（ブロック）を把握することは出来ない。石器は全体的に小形であり、大形の剝片（素材）はみられない。ナイフ形石器は、いわゆる金谷原型に類型をみると、より小形であり、打面を残し、調整は背面基部側刃のみで細く作る調整で、先端が尖がる一群（第4図1～4、A類Ia類一下堤型ナイフ形石器）が特徴である。最も出土数の多い米ヶ森型台形石器は形態が種々あるが、二次加工がみられる石器も含めて、その相違は石器の機能（本質）に影響はなく剥取された部位（順序）により異なるものである。米ヶ森型台形石器の機能については富樫（1977年）の言及があり、組み合せ具として細石刃とは別の装着方法が考えられると推定している。しかし、組み合せ具としては困難な条件（湾曲が強いこと、刃部の形状等）が多く、溝を掘る道具とされる彫刻刀形石器の伴出がない事など、組み合せ具としての機能は否定的である。が、米ヶ森技法は大量生産志向である（他に米ヶ森型台形石器を出土している岩手県上北郡遺跡では出土数が少ない）。米ヶ森型台形石器の石核の各面に摩擦による光沢がみられるものが多く、米ヶ森型台形石器も含め今後、顕微鏡的観察が必要とされる。接合関係をみると、これから作業においてかなり接合すると予想される剝片、残核があり、石の色、質などから大別して2個体の母岩がある。これらの母岩から石刃技法を基盤として、ナイフ形石器、石刃、米ヶ森型台形石器が生み出されているが、いわゆる石刃核は見当らない。これは核を残さない剝片剝離による結果か、他に製作地が存在するものであろうか。石刃の81%、ナイフ形石器の85%はA類であり単設打面による剥取の多い事を物語っている。このユニットにおいて米ヶ森型台形石器が製作、使用された事は確かである。接合関係の作業を早く進めて剝片剝離技術的解明をしたい。

偏在的石器組成の様相を示すこのユニットは杉久保系文化の中で疊群、台石を包含し、石器製作地であり作業場、居所であると考えられ、ある一定期間の生活跡として把握できる遺跡である。

編年的な問題については米ヶ森型台形石器を見る限り、出土している遺跡は比較的近接地域である岩手県胆沢町「上北郡遺跡」⁵⁾秋田県協和町「米ヶ森遺跡」能代市「此掛沢Ⅱ遺跡」と「下堤G遺跡」⁶⁾である。比較する遺跡は少ないが米ヶ森型台形石器と共に伴するナイフ形石器に共通性がありそうである。米ヶ森型台形石器を含む石器組成をもつ遺跡が今後どの地域に確認されるものか、資料の増加に伴ない編年的位置づけがなされ、石器群の総体的な様相が示されるであろう。

現在まだ全資料の検討がなされていない段階であり、概報とせざるを得なかった。

参考文献

- 1)内藤博夫：「秋田県岩見沢流域およびその周辺の段丘について」 第4紀研究第4卷第1号
1965年
- 2)富樫泰時：「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」 協和町教育委員会 1977年
- 3)富樫泰時：村岡百合子「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」 協和町教育委員会 1976年
- 4) 2)と同
- 5)菊地強一：「旧石器時代の東北」 東北歴史資料館（岩手県） 1981年
- 6)富樫泰時：「道路詳細分布調査報告書」（此耕沢Ⅱ遺跡） 秋田県文化財調査報告書第93集、秋
田県教育委員会 1982年



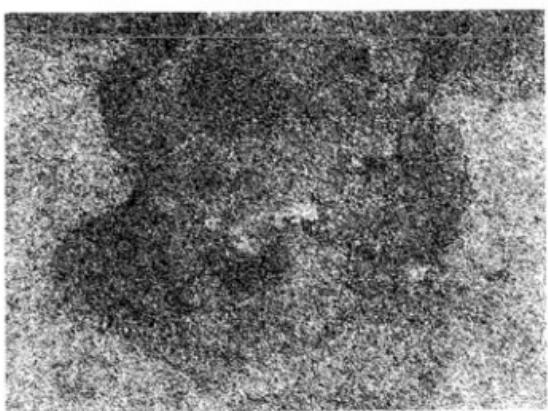
調査区全景 M b 層(西→)
(南→)



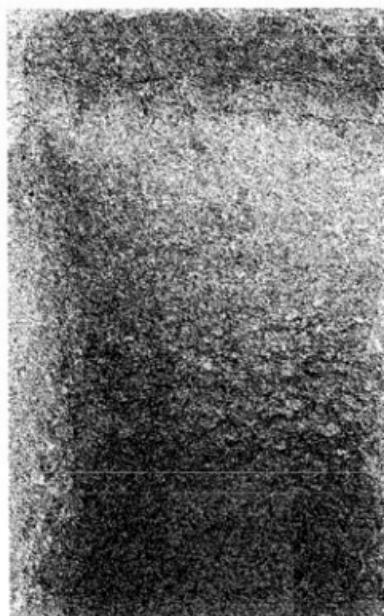
石器出土状態

標 1・2 群
(南→)

図版 1



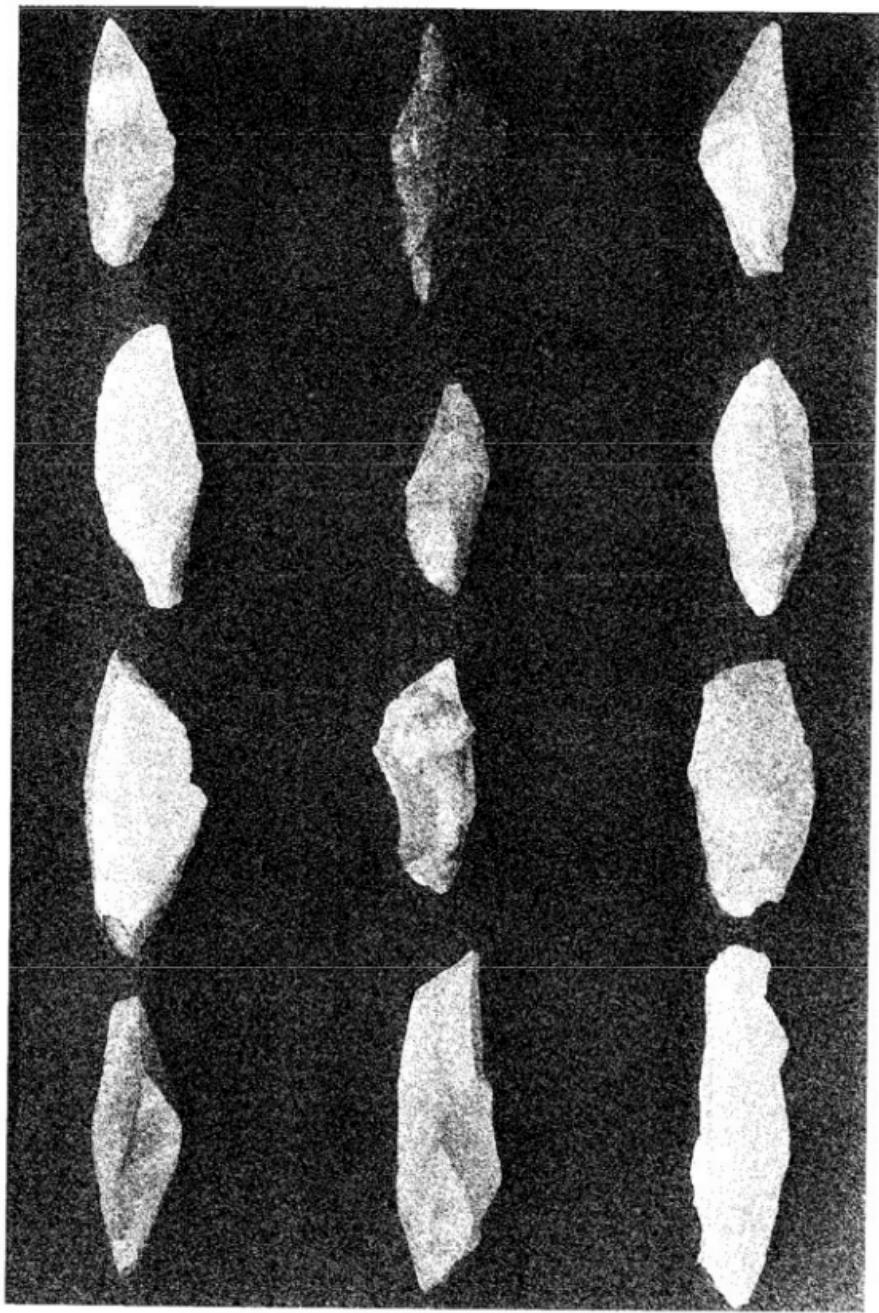
土塙 1



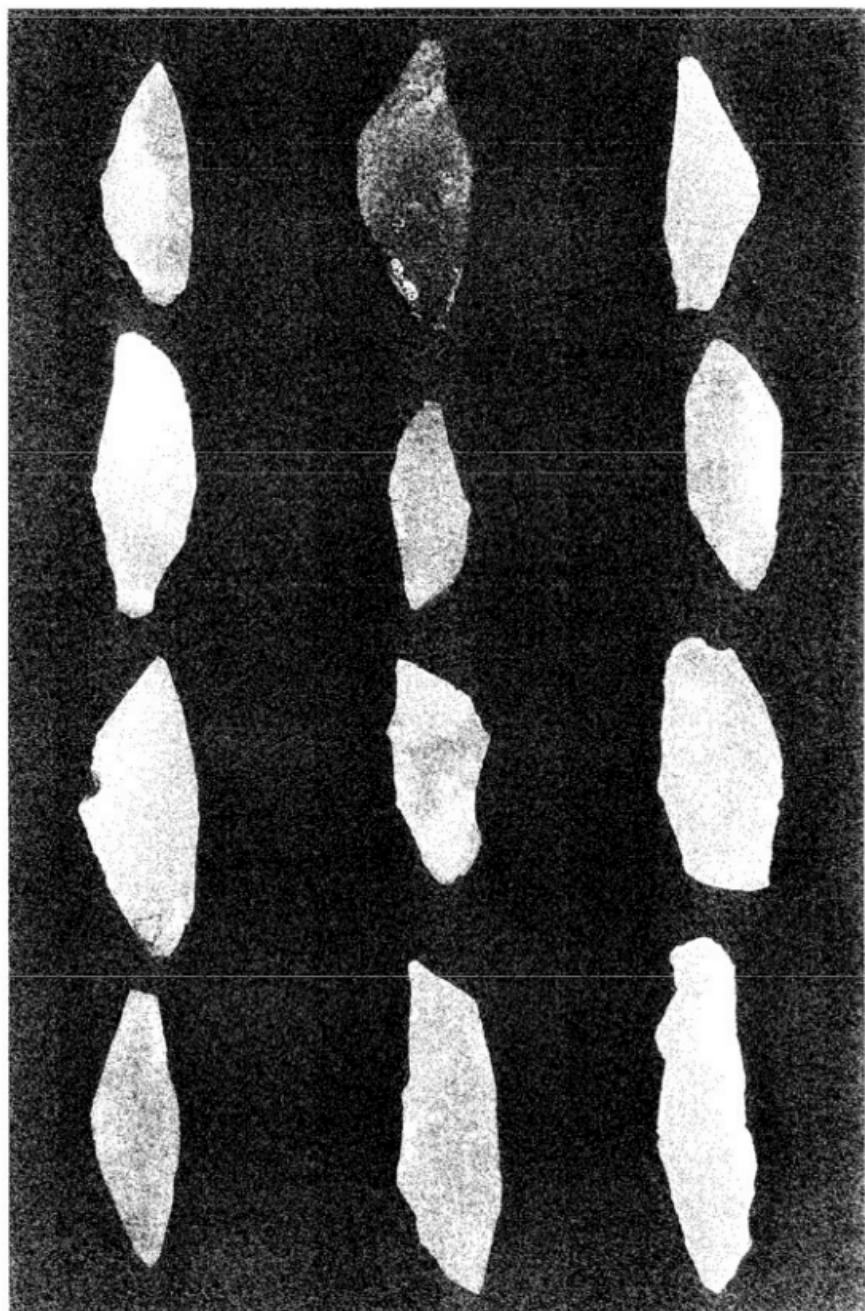
土層断面



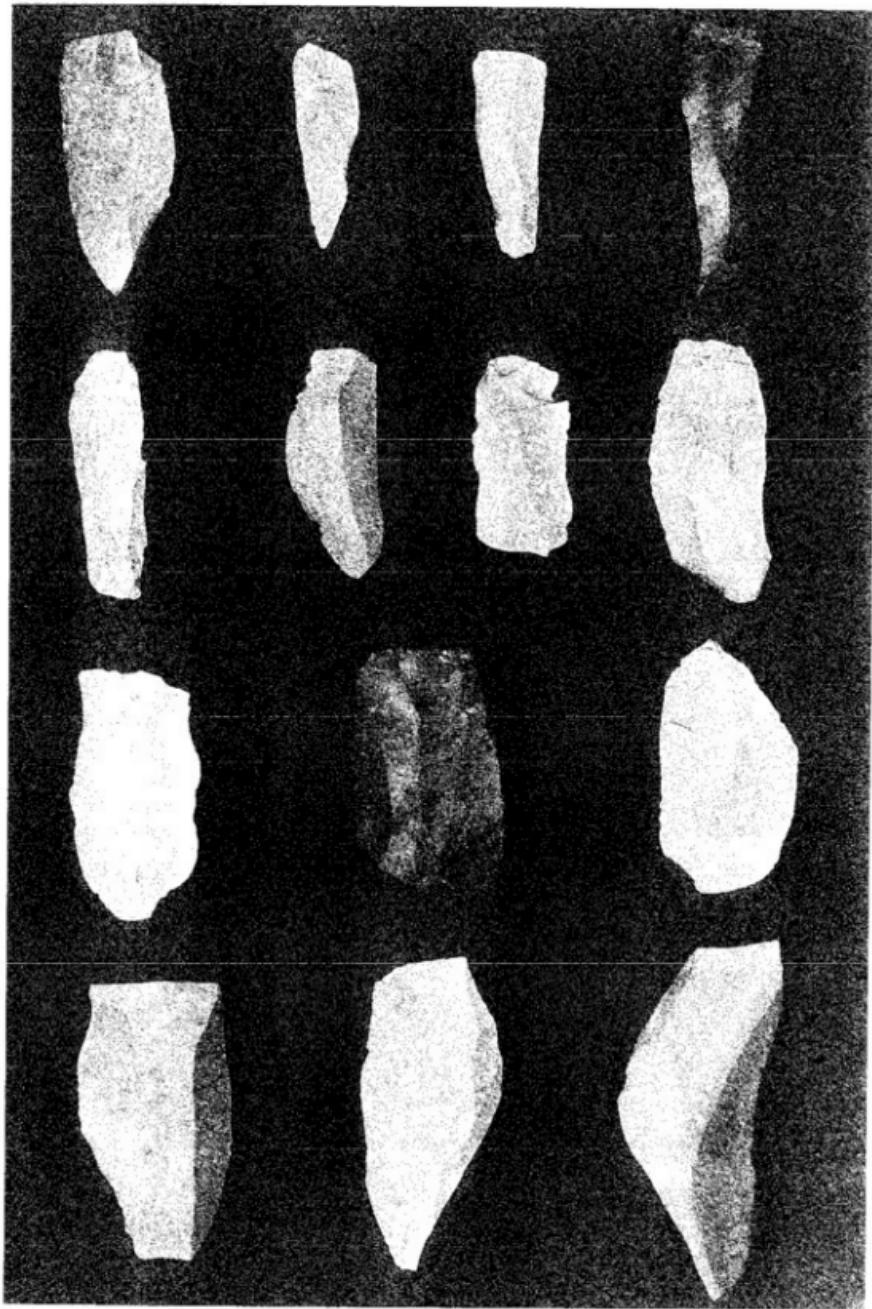
図版2 土塙2・3・4



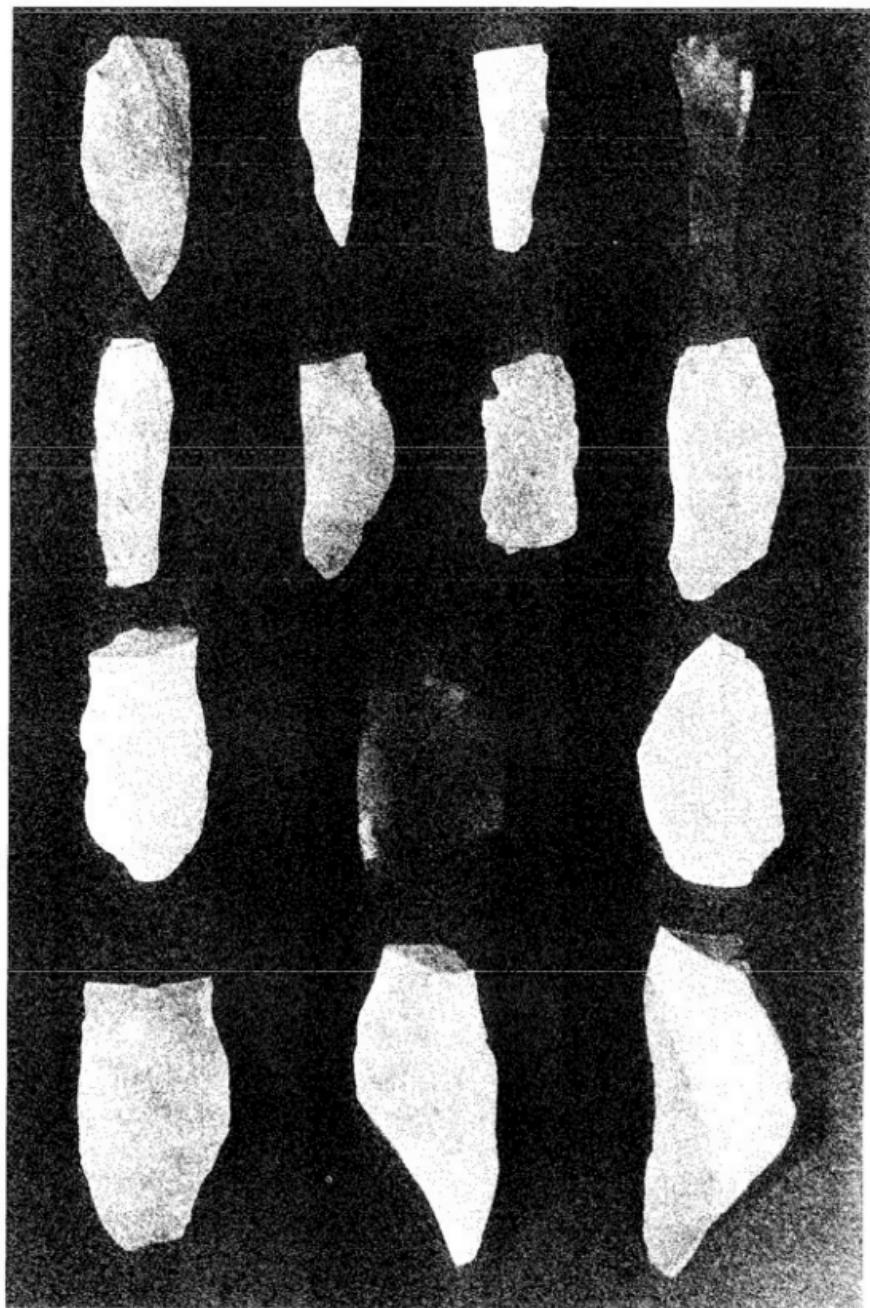
図版 3 ナイフ形石器



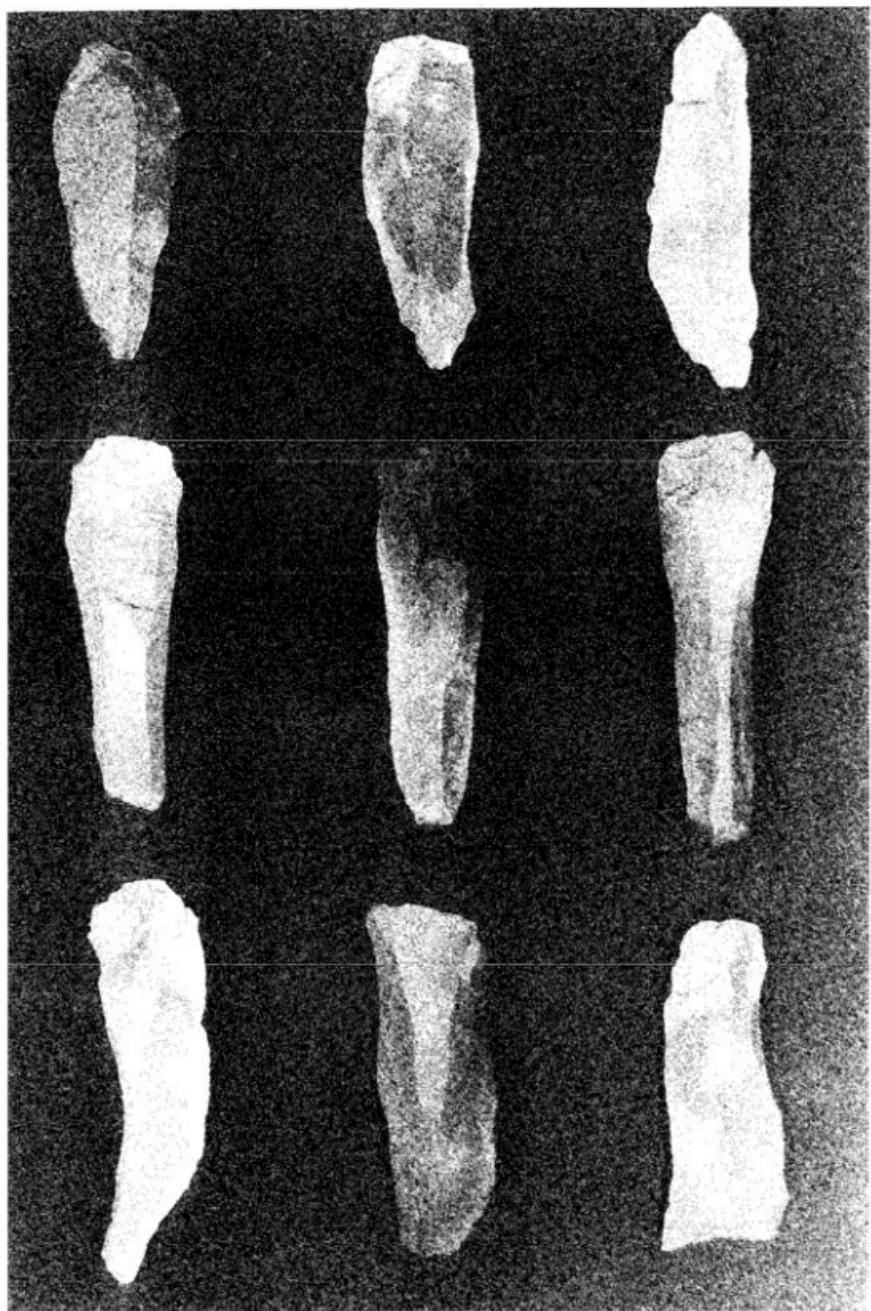
図版 4



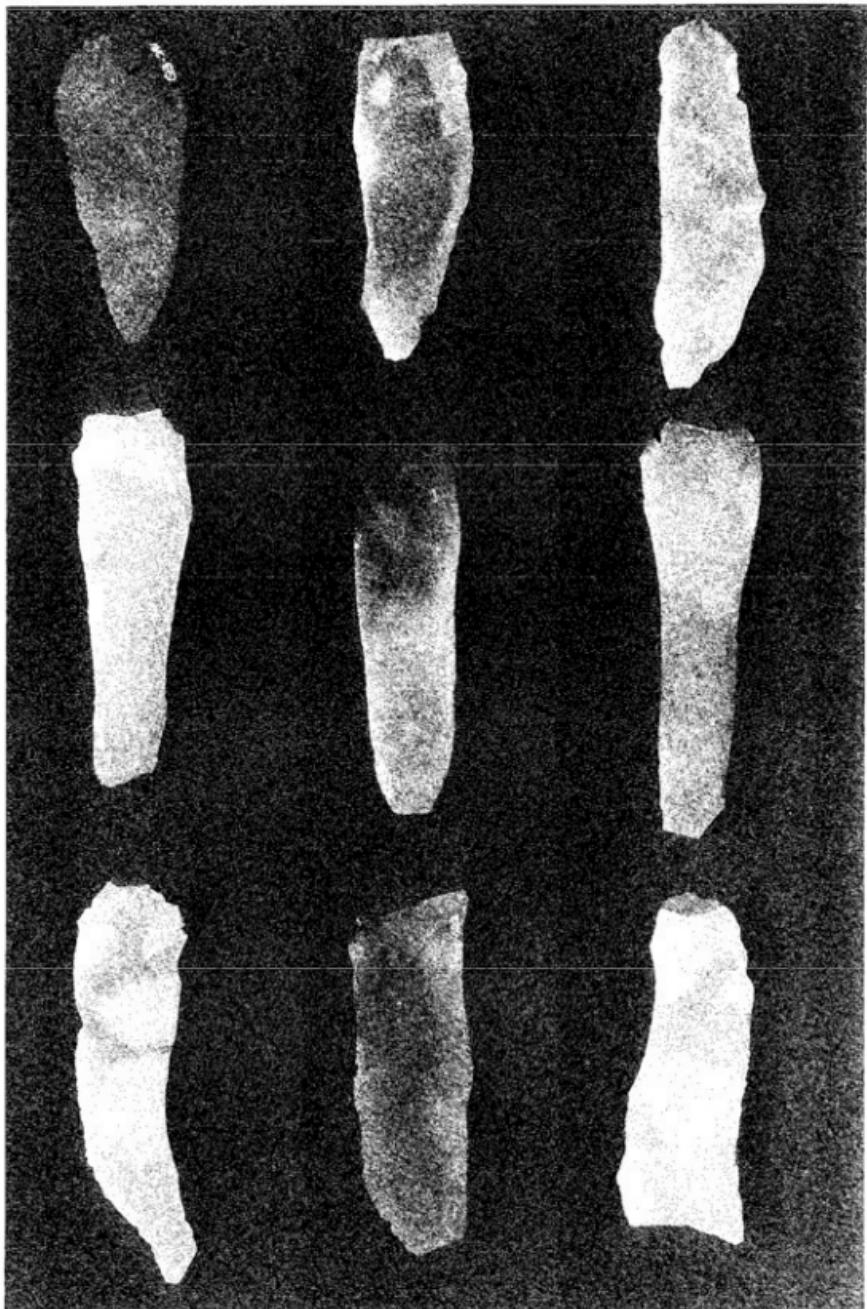
図版5 ナイフ形石器・石刀



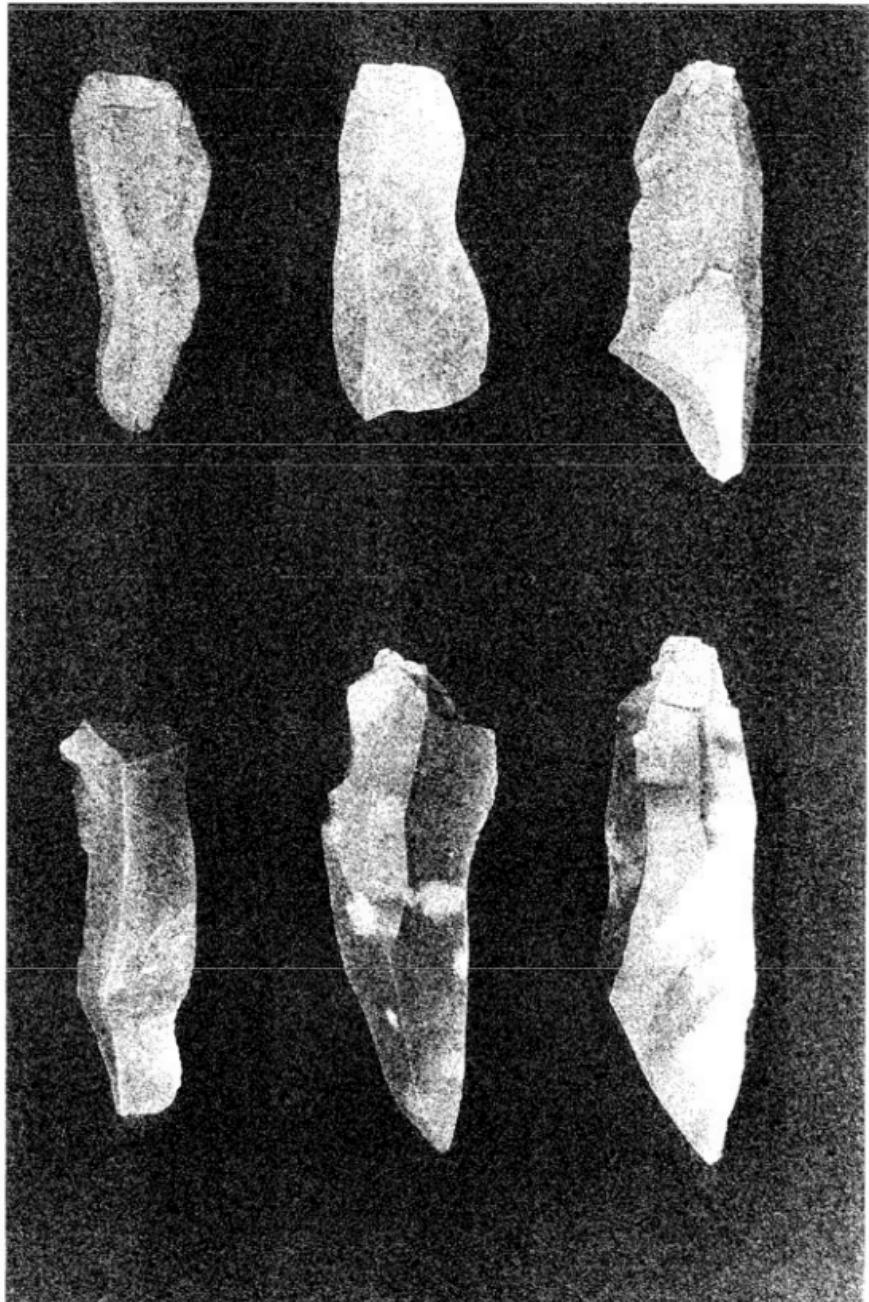
図版 6



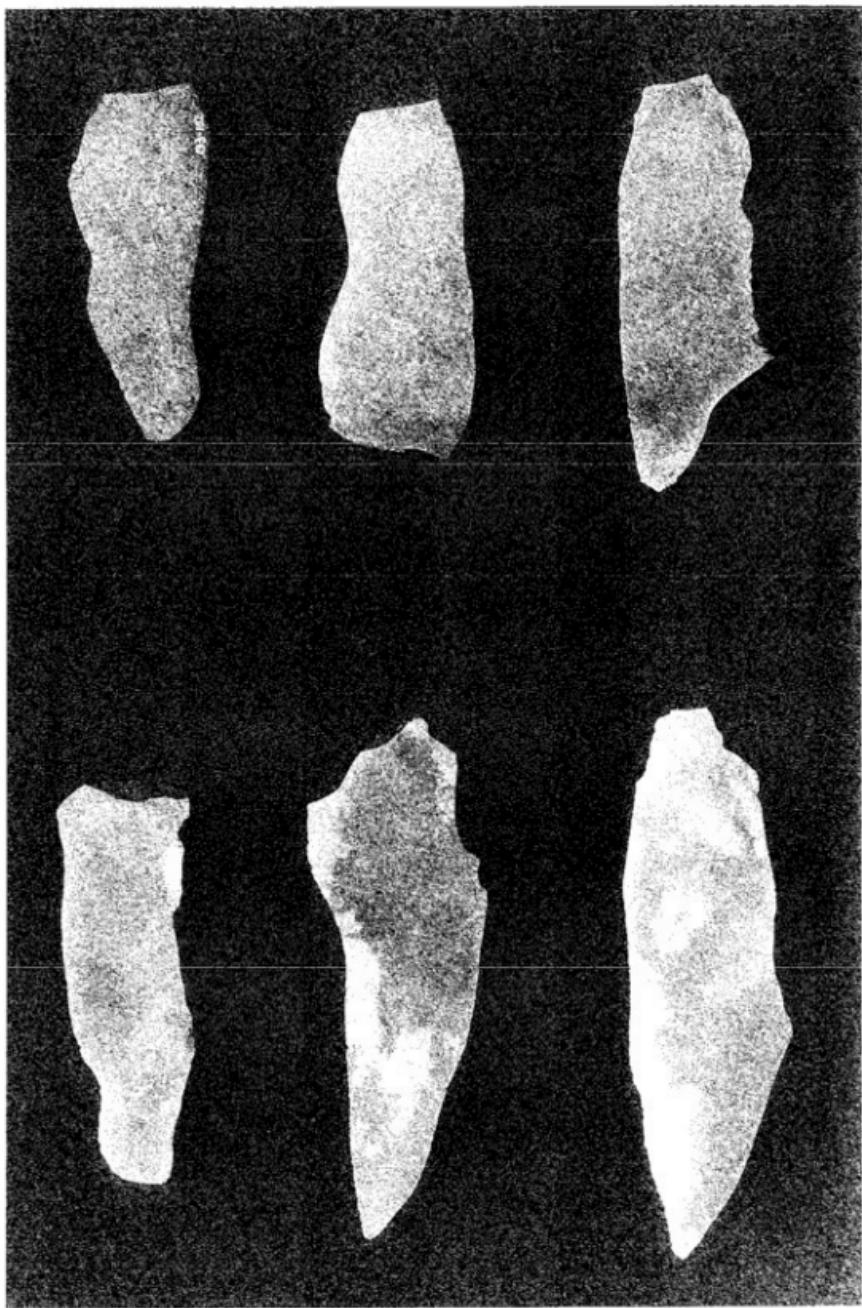
図版7 石刃



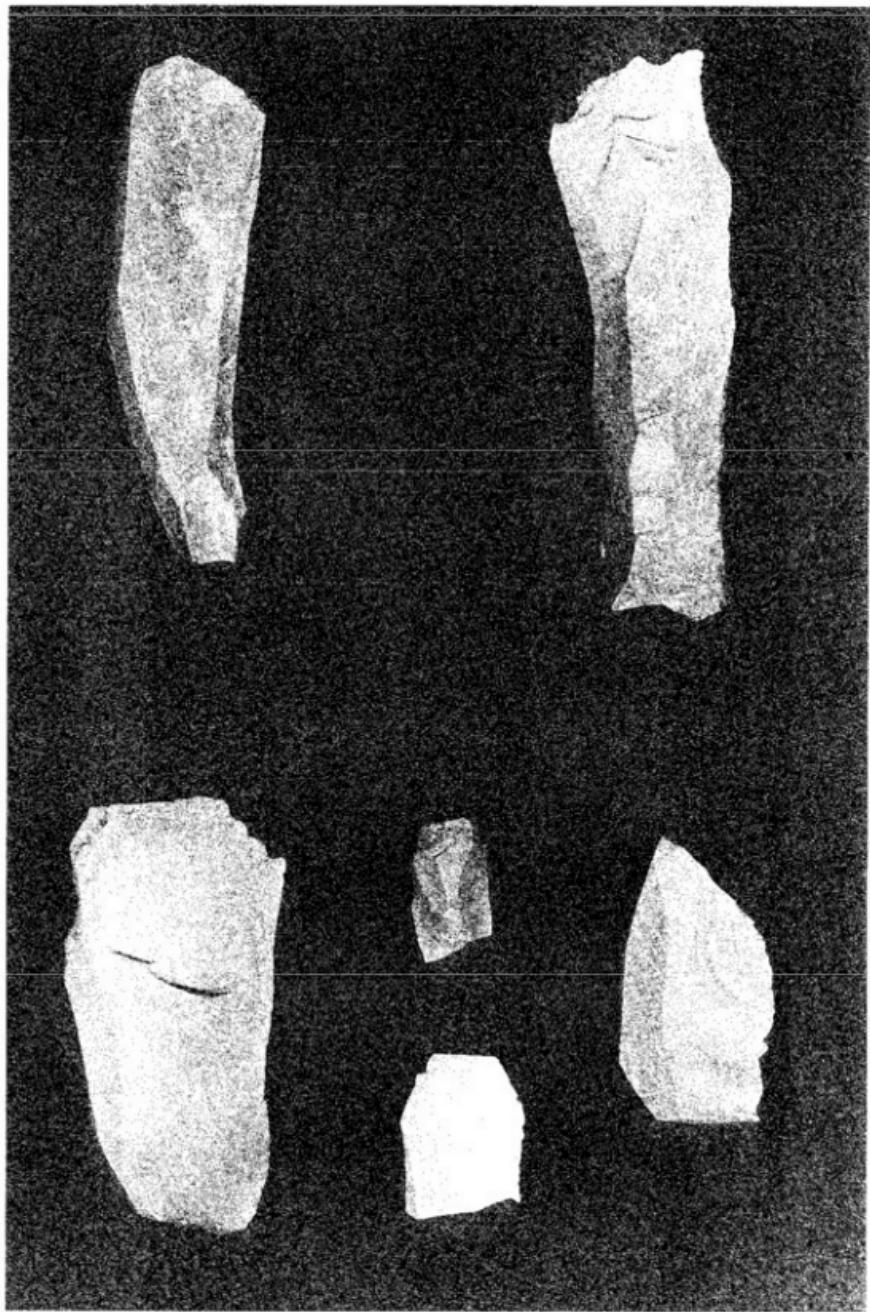
図版 8



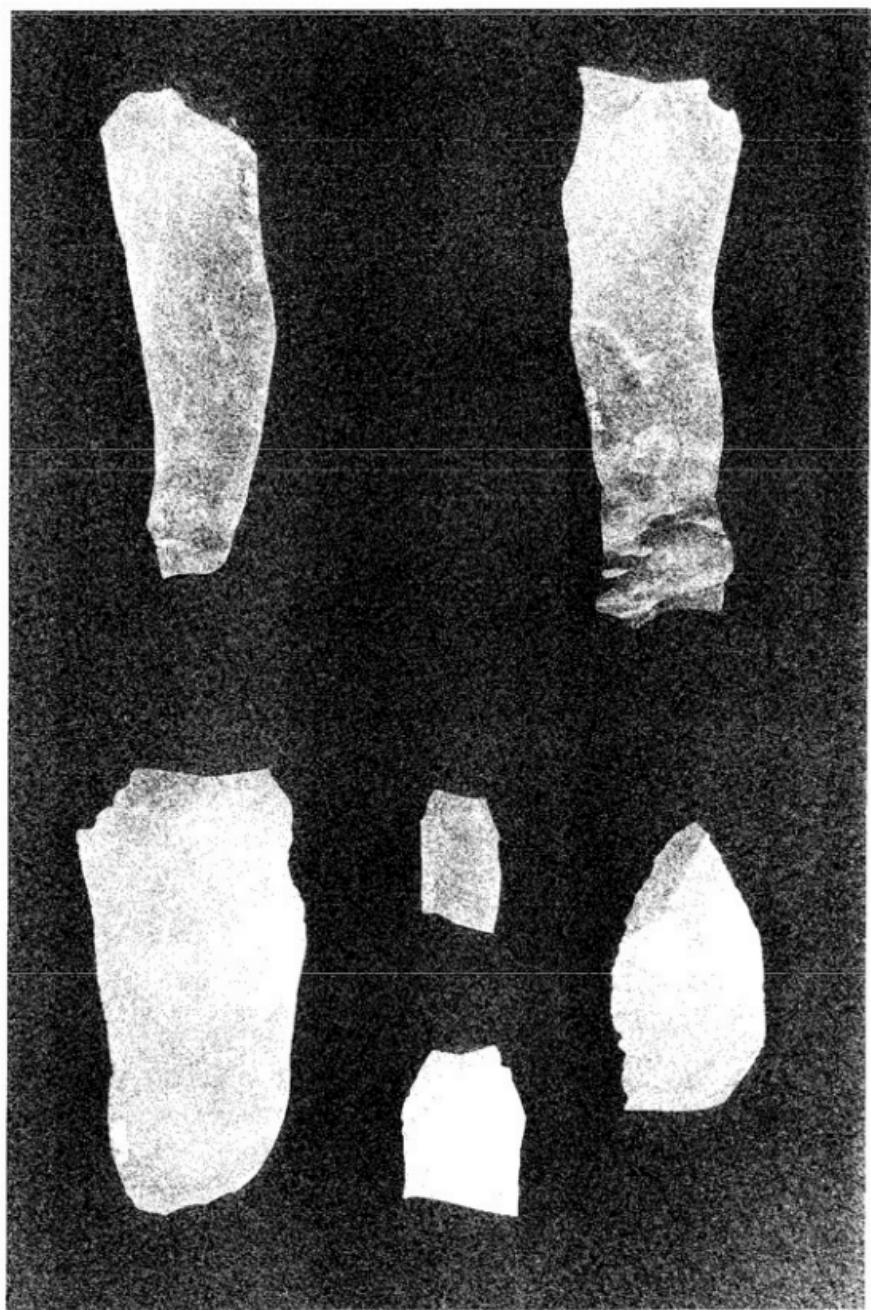
圖版 9 石刃



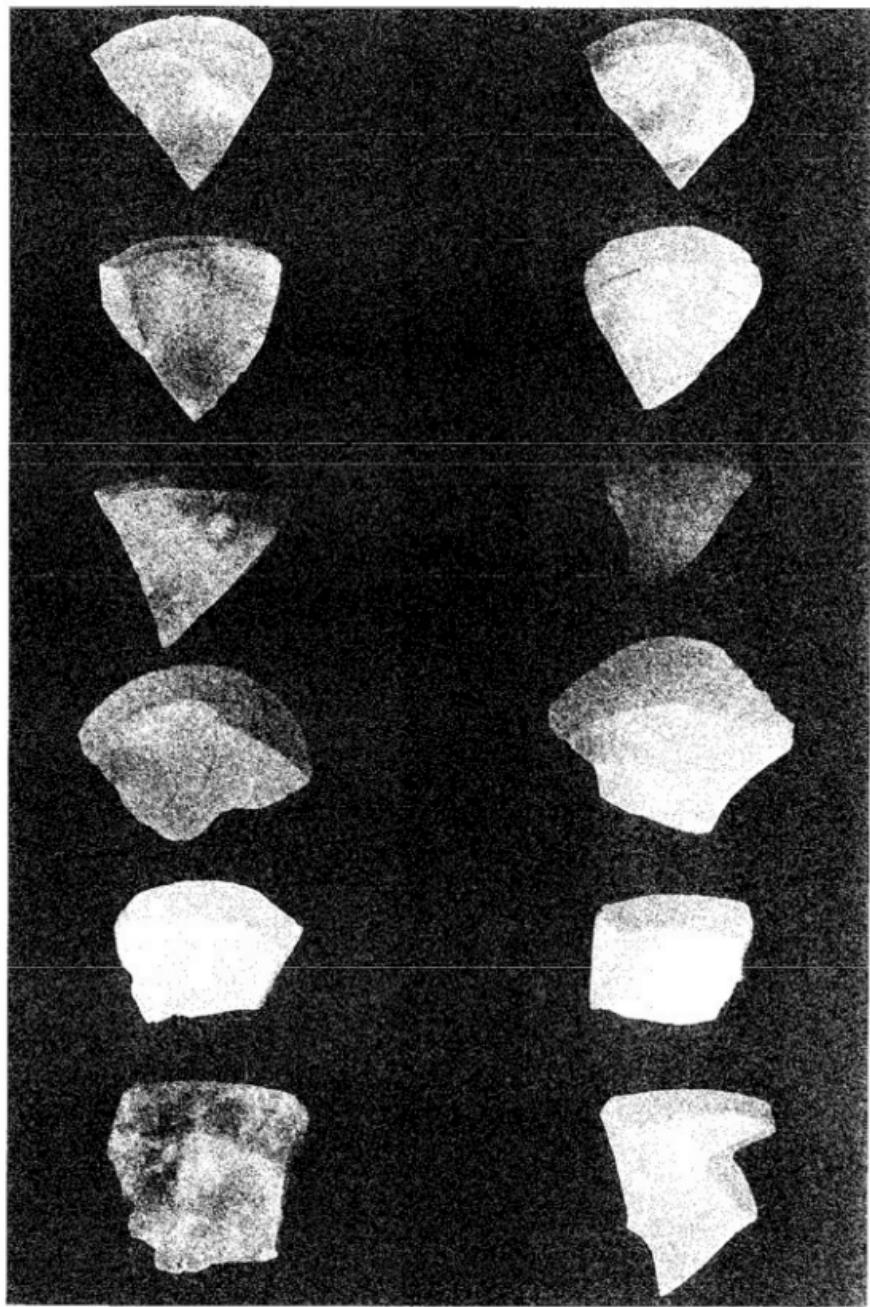
図版10



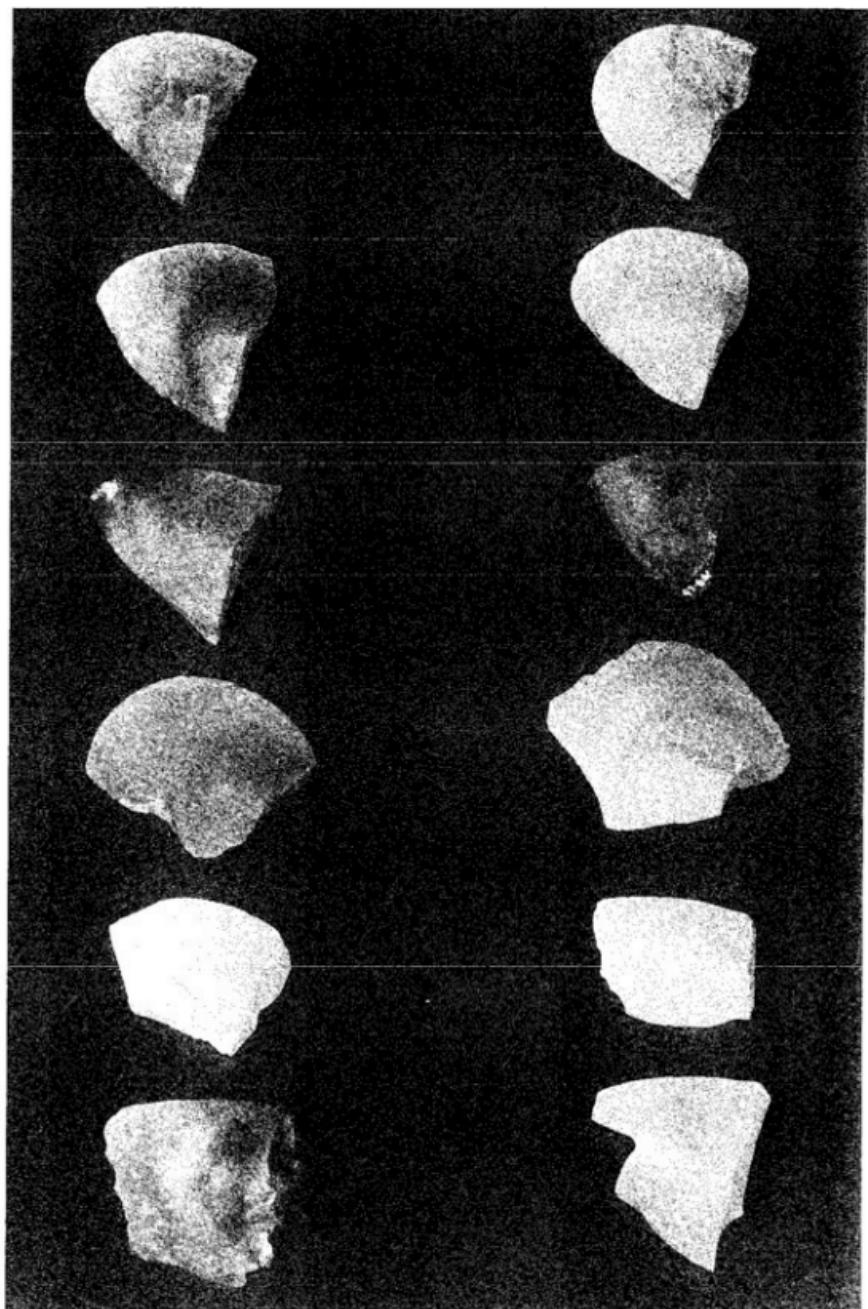
圖版11 石刃



図版12



図版13 米ヶ森型台形石器



図版14